

漢文教室

第209号

2023年4月

巻頭エッセイ 漢詩をゆっくりと味わう……………横山悠太 1

特集❖ 漢詩を作ろう

▶授業実践

高校生に対する漢詩実作指導について……………小嶋明紀子 4
パズル感覚で漢詩実作——漢詩カードを用いて……………高岡佑希 9
「山月記」を読んで七言絶句を作る……………岡本利昭 14

漢詩作りをサポートする『漢詩創作のための詩語集』…………… 18

櫻の林の満開の下 追悼 石川忠久先生……………水出樂山水 23

▶連載

新連載【陶淵明没後一六〇〇年】

陶淵明をめぐる五つの断章・その一「園田」の境位……………坂口三樹 26
小中学校漢文科授業参観 漢文をより身近なものに……………吉澤結衣 13
クエスション&アンサー ヨコト点……………清水信子 29
教科書で出会う美術名品ガイド②
日本画家、安田靫彦の描く《鴻門会》……………鶴見香織 30
2023年度大学入学共通テスト「国語」漢文の分析と指導……………北澤紘一 34

▶新刊紹介

西嶋佑太郎著『医学をめぐる漢字の不思議』……………古田島洋介 38
小曾戸洋著『中国伝統医学 名医・名著小百科』……………末岡 実 39
笹原宏之編著『なぞり書きで脳を活性化 画数が夥しい漢字121』
……………山下真里 40

大修館書店 新課程教科書のご紹介…………… 28

新課程国語教科書の特設サイトもぜひご覧ください！



機関誌・内容解説資料

大修館書店

漢詩をゆっくりと味わう

横山悠太
よこやまゆうた

(小説家)

漢詩には多様な味わい方があります。書にする人もいれば、朗吟する人もいます。また、漢詩を自作する人もいます。でも圧倒的に多いのは、本などで名詩選を読んで味わう人でしょう。いずれにしても、まずは古典を目で鑑賞するというのがベースにあるかと思います。

そういった漢詩鑑賞のための本は、世に溢れています。そして、この手の本の多くには、原文の他に訓読や口語訳、語釈、解説などがところ狭しと載っています。漢詩の内容を誤解のないように理解させるには、仕方ないことなのかもしれません。しかし、もう少し事前情報の少ない状態で楽しむことはできないものだろうか、と思うことがあります。

そもそも詩というものは、もっと軽やかで、余白があるものです。余白あつての詩です。余白があらかじめ色々なもので埋められていては、せっかくの鑑賞の機会が奪われてしまっているのではないかとさえ思います。

ジャンルは違いますが、例えば、美術館で絵画を鑑賞する

時のことを思い出してみてください。作品にはよく解説が添えてありますが、まずはあえてそれを読まずに、絵を少しのあいだ眺めてみるということを、多くの人は意識的にやっているのではないのでしょうか。それはおそらく、まずは先入観なく、この目の前の作品と対峙したい、という欲求からではないかと思います。

そこで試しに、ここではそのような態度で、漢詩を鑑賞してみようと思います。まずは、次の漢詩を見てください。

千山鳥飛絶
万径人蹤滅
孤舟蓑笠翁
独釣寒江雪

漢詩を読み慣れた人であればともかく、高校生にはさすがに難しいだろう、と思われるかもしれません。でも、全くわからないわけではないはずです。

これは千年以上前の外国の詩です。原詩ですから、当然外国語のままです。それなのに、この言葉（中国語）を勉強していない人でも、ところどころ意味がとれてしまうのではありませんか。というより、高校生でもこの詩で使われている漢字のほとんどを知っているではありませんか。なかでも「山・鳥・舟・翁・釣・雪」などは、漢字を見ただけでイメージが頭に浮かぶはずです。これだけでも、もうこの詩の世界にすっぽり入り込んだようなものです。古い外国の詩なのに、原詩を眺めているだけで、こんなに理解できてしまうのです。

では続いて、いま一度ゆっくりと、一字一字を順に舐めるように、原詩を眺めてみてください。まずは一句目です。「千」の「山」、つまり、多くの山があるのかな、「鳥」が「飛」んでいるのかな、ということが容易に読み取れます。「絶」は「たえる、とぎれる」の意ですから、飛んでいる鳥が姿を見せなくなった、という意味に取れます。ちなみに、五言詩の場合、二字と三字の間に意味の区切りがあります。続いて二句目。「怪」は高校生には少し難しいかもしれませんが。ここで、無理に調べなくてもいいし、調べてもかまいません。調べるなら、漢和辞典をおすすめします。辞典を引くと、「怪」は「小道」の意であることがわかります。ですから、「万怪」は、たくさんの小道がある、という意でしょ

う。「人」の次の「蹤」も難しいですね。この字も辞典で調べてみると、「足あと」という意だとわかります。「滅」は「きえる」の意ですから、この三字で「人の足あとがきえた」という意だとわかります。

ここまで来て、勘のいい人は、おやつと思うはずです。「滅」とその横の「絶」はおんなじような意味だな、と。そして、「千」「万」という数を表す字も横並びになっているな、と。そうなんです。この前半の二句は対句になっているんです。人に指摘される前に対句を見つけると、嬉しいものです。

三句目はそんなに難しくありません。一そうの舟に蓑笠姿のお爺さんが乗っている、ということでしょう。最後の四句目も、「江」が川のことだと分かれば問題ありません。「独」りなのは誰だろうと考えてみると、やはりここは蓑笠の「翁」でしょう。そのお爺さんが、雪降る川に舟を浮かべて、ひとりで釣りをしている、というわけですね。

これで、この詩の字面での意味はだいたい把握できたかと思いますが。人によって、感じ方はそれぞれあるでしょう。私は、前半の「千」「万」という数を出しておいて、「絶」「滅」でそれを打ち消すところが好きです。この演出によって後半の「孤」と「独」が一層際立ちますから。そして、この詩はまさに「絵」になります。実際、この詩は山水画などの格好の題材になっています。

この段階で、研究者による語釈や口語訳、解説に目をやっても構いませんが、それをもう少し先延ばしして、さらにゆつくり詩を味わう方法があります。それは、次のように声を出して読んでみることです。

千山鳥飛絶

万径人踪滅

孤舟蓑笠翁

独釣寒江雪

なんだこりや？ と首を傾げる人もいるかもしれませんが、唐詩研究の第一人者である松浦友久先生の著書『漢詩―美の在りか―』（岩波新書）という本にも、同じようなことが書いてあり、我が意を得たり、と嬉しくなったことがあります。ぜひ声に出して、ゆつくりと読んでみてください。調子の良さがより感じられるはずです。それに、先ほど一字一字の意味を確かめておいたので、初見の時より、詩がいきいきと迫ってくる感じがしませんか。

日本語の漢字音と中国語の響きは違うだろう、という意見もあるかもしれませんが、とはいえ、日本語の漢字音だって、元はといえば、その当時の中国語の発音に由来するわけでは

し、今の中国語も当時の中国語とは変化しているのですから、出所は同じです。韻が踏まれている三字「絶」「滅」「雪」も、日本語読みでしつかり確認できます。ただ、注意しなければならぬのは、中国語の二音節は、日本語の二音節に相当するので、例えば「飛」を「ひい」と伸ばして読むことで、調子を整える必要があります。「1、2、3、4……」と数える時に、「いち、にい、さん、しい……」と読むのと同じです。

いかがでしたか。これが私なりのスローな漢詩鑑賞法です。ところで、ひとつ触れなかったものがあります。それは「訓読」です。私の場合、訓読は「文語自由詩」という別物として味わうようにしています。訓読は日本人が漢詩を鑑賞するための非常によくできた装置でしたが、それでも一方で、訓読には強引で、中途半端なところがあります。日本語の漢字音で味わう方法より、原詩からの歪みが大いのではないかと思います。それに、漢詩の格調高くて近寄りづらいイメージも、この訓読のせいではないかと思っています。ですから、訓読は後回しにしたわけです。

取り上げたのは、柳宗元の「江雪」という詩でした。令和四年度から使用中の『言語文化』『新編 言語文化』（大修館書店）にも載っています。

【授業実践】高校生に対する漢詩実作指導について

こじま あきこ
小嶋明紀子

(東京都立荻窪高等学校)

1 はじめに

筆者は既に数校の高校において漢詩実作を指導し、うち一名を「二〇一〇 国民文化祭」において入選に導き、うち一名を平成二十七年二松学舎大学主催「全国学生・生徒漢詩コンクール」において入選に導き、うち一名を「第二回漱石記念漢詩大会」において奨励賞に導いた。

高校における漢詩実作指導に関する報告は、既に全国漢文教育学会の『新しい漢字漢文教育』第五十一号に発表しているので、併せて参照されたい。本稿は、その後、幾つかの高校における指導の経験を経た上での具体例の紹介である。

2 動機づけの方法

現在、漢詩実作は、俳句実作、短歌実作等に比べて、成人でも未だ耳慣れないものである。そこで、高校生から「自分も漢詩を作ってみたいです」という声を引き出すことが重要になる。年間授業計画において「漢詩」を扱う時期をなるべく

く早めに設定するとういと思う。

資料①『古典探究プリント『漢詩を作るために』』は、授業内で全員に配布するプリントの一例として作成した。このようなプリントを用い、漢詩実作は面白いということを伝え、生徒の興味を喚起する。プリント作成にあたっては、あまり細かいことは書かずに漢詩実作の醍醐味を凝縮して示すことが効果的だと感じている。指導者の自作の漢詩や、他の高校の生徒の漢詩作品をあわせて見せるのも効果的である。

現在、各種の漢詩コンテストにおいて、若年者のための特別賞を設ける動きがあり、高校生の作品の紹介をしやすい環境が整えられている。

授業内で発展学習として漢詩実作を扱う時間を設けることができればベストであるが、興味をもってくれた一部の生徒を対象に、放課後などの時間を利用し、補習の形で漢詩実作の指導を行うのもよいと思う。

古典探究プリント「漢詩を作るために」

年 組 番 氏名

①漢詩の基礎知識（大学入試に出題される範囲です）

【漢詩の詩形】七言絶句、五言絶句、五言律詩、七言律詩が代表的。

【押韻とは何か】漢詩の場合、同じ韻目に属する字で押韻を踏むことを言う。

大学入試における漢詩の韻に関する問題は、「押韻を踏む規則がある。たとえば、*an*・*ang*・*ing* のように、*i* で終わる音の字をみえる」ことを理解しているか。

を問う。

②漢詩の発展的知識（大学入試の出題範囲を超えた、専門的知識です）

【韻目】

同じ「*i*」でも、次のような相違がある。

【例】**【支韻】の韻目に属する字…枝（し）・詩（し）など**

【微韻】の韻目に属する字…飛（ひ）・衣（い）など

漢字を昔の中国語で読んだ時の音の調子（平声、上声、去声、入声）のうち、上、去、入を仄声という。漢和辞典で確認する。庾子評書の漢和辞典にも「平」「上」「去」「入」のどれかが書いてある。

【平仄】

漢字を昔の中国語で読んだ時の音の調子（平声、上声、去声、入声）のうち、上、去、入を仄声という。漢和辞典で確認する。庾子評書の漢和辞典にも「平」「上」「去」「入」のどれかが書いてある。

【平仄】

漢字を昔の中国語で読んだ時の音の調子（平声、上声、去声、入声）のうち、上、去、入を仄声という。漢和辞典で確認する。庾子評書の漢和辞典にも「平」「上」「去」「入」のどれかが書いてある。

漢字を昔の中国語で読んだ時の音の調子（平声、上声、去声、入声）のうち、上、去、入を仄声という。漢和辞典で確認する。庾子評書の漢和辞典にも「平」「上」「去」「入」のどれかが書いてある。

漢字を昔の中国語で読んだ時の音の調子（平声、上声、去声、入声）のうち、上、去、入を仄声という。漢和辞典で確認する。庾子評書の漢和辞典にも「平」「上」「去」「入」のどれかが書いてある。

漢字を昔の中国語で読んだ時の音の調子（平声、上声、去声、入声）のうち、上、去、入を仄声という。漢和辞典で確認する。庾子評書の漢和辞典にも「平」「上」「去」「入」のどれかが書いてある。

漢字を昔の中国語で読んだ時の音の調子（平声、上声、去声、入声）のうち、上、去、入を仄声という。漢和辞典で確認する。庾子評書の漢和辞典にも「平」「上」「去」「入」のどれかが書いてある。

漢字を昔の中国語で読んだ時の音の調子（平声、上声、去声、入声）のうち、上、去、入を仄声という。漢和辞典で確認する。庾子評書の漢和辞典にも「平」「上」「去」「入」のどれかが書いてある。

漢字を昔の中国語で読んだ時の音の調子（平声、上声、去声、入声）のうち、上、去、入を仄声という。漢和辞典で確認する。庾子評書の漢和辞典にも「平」「上」「去」「入」のどれかが書いてある。

漢字を昔の中国語で読んだ時の音の調子（平声、上声、去声、入声）のうち、上、去、入を仄声という。漢和辞典で確認する。庾子評書の漢和辞典にも「平」「上」「去」「入」のどれかが書いてある。

漢字を昔の中国語で読んだ時の音の調子（平声、上声、去声、入声）のうち、上、去、入を仄声という。漢和辞典で確認する。庾子評書の漢和辞典にも「平」「上」「去」「入」のどれかが書いてある。

漢字を昔の中国語で読んだ時の音の調子（平声、上声、去声、入声）のうち、上、去、入を仄声という。漢和辞典で確認する。庾子評書の漢和辞典にも「平」「上」「去」「入」のどれかが書いてある。

漢字を昔の中国語で読んだ時の音の調子（平声、上声、去声、入声）のうち、上、去、入を仄声という。漢和辞典で確認する。庾子評書の漢和辞典にも「平」「上」「去」「入」のどれかが書いてある。

漢字を昔の中国語で読んだ時の音の調子（平声、上声、去声、入声）のうち、上、去、入を仄声という。漢和辞典で確認する。庾子評書の漢和辞典にも「平」「上」「去」「入」のどれかが書いてある。

漢字を昔の中国語で読んだ時の音の調子（平声、上声、去声、入声）のうち、上、去、入を仄声という。漢和辞典で確認する。庾子評書の漢和辞典にも「平」「上」「去」「入」のどれかが書いてある。

漢字を昔の中国語で読んだ時の音の調子（平声、上声、去声、入声）のうち、上、去、入を仄声という。漢和辞典で確認する。庾子評書の漢和辞典にも「平」「上」「去」「入」のどれかが書いてある。

漢字を昔の中国語で読んだ時の音の調子（平声、上声、去声、入声）のうち、上、去、入を仄声という。漢和辞典で確認する。庾子評書の漢和辞典にも「平」「上」「去」「入」のどれかが書いてある。

漢字を昔の中国語で読んだ時の音の調子（平声、上声、去声、入声）のうち、上、去、入を仄声という。漢和辞典で確認する。庾子評書の漢和辞典にも「平」「上」「去」「入」のどれかが書いてある。

漢字を昔の中国語で読んだ時の音の調子（平声、上声、去声、入声）のうち、上、去、入を仄声という。漢和辞典で確認する。庾子評書の漢和辞典にも「平」「上」「去」「入」のどれかが書いてある。

漢字を昔の中国語で読んだ時の音の調子（平声、上声、去声、入声）のうち、上、去、入を仄声という。漢和辞典で確認する。庾子評書の漢和辞典にも「平」「上」「去」「入」のどれかが書いてある。

車

【資料①】

【実際の詩作に当たって】

①「最も詠いたいこと」をはっきりさせるのが大切。

②結句に「最も詠いたいこと」を配置する構成にすると、上手く出来る。

③最初に現代日本語で考えたアイデアを、押韻や平仄を合わせるため少し変える必要がある。その方が良くなることもあるので、色々と工夫してみよう。

【例】

【最も詠いたいこと】

源義経の忠義の臣である佐藤兄弟の妻たちに対する感慨。

【起承転結のアイデア】

起句：医王寺の様子。

承句：佐藤兄弟の戦死。

転句：妻たちは、けなげだ。

結句：母の嘆きを思い、よろいを着たとは。

過奥州医王寺

奥州の医王寺に過る

小嶋明紀子

碧鮮の古碑 喬木囲む

碧鮮の古碑 喬木囲む

良臣南北絶無婦

良臣 南北して 絶えて帰る無し

可憐娣娣慈母

可憐な 娣娣して 慈母を慰めん

不着金衣着鉄衣

金衣を着ずして 鉄衣を着るを

【韻目は微韻。韻字は囲・婦・衣。仄起式。】

（訳）奥州の医王寺に立ち寄る

こけむした古い碑は高い木に囲まれている。／（源義経の忠義の臣、佐藤兄弟のうち）兄の佐藤継信は南の四国の屋島で、弟の佐藤忠信は北の京都で死に、優れた家来である二人は帰らぬ人となった。／彼らの妻たちが、しゅうとめの悲しみをなぐさめようと、美しい衣を着ずによろいを着たという話は哀れをもよおす。

工夫：「金衣」と「鉄衣」を対語にした。（金属とついで対になる。）

3 近体詩の規則についての説明

漢詩は韻を踏まなくてはならないということは、大学入試においても問われることであり、高校の学習で必須の事柄であるが、「平仄」の具体的な知識は大学入試でも問われない。故に、高校生が初めて漢詩を実作する場合、とにかく「漢詩は韻を踏むものだ」と意識させる。平仄については、生徒が自分で考えた作品のアイデアを損なわない形で、指導者が、ほぼ同じ意味の他の語を紹介するなどして、上手く整えて行けばよいというのが筆者の考えである。しかし、平仄について学ぶと「二字目・四字目・六字目を○・●・○にするのですか？ 面白いですね」という声が聞かれることも多かった。この規則そのものについての興味を維持させつつ、平仄を合わせることにについては、高校生に無理をさせずに、指導者がサポートする態度が大切であると思う。

なお、教科書に掲載されている漢詩作品の押韻・平仄について、本当に規則に合っているのか、漢和辞典を用いて検証させる「調べ学習」も、「興味深かった」という声が挙がったが、漢詩実作に対する興味にダイレクトに結びつくかは未だ定かではない。

教科書に載るような漢詩でも、平仄の合っているものばかりではない。そのため、王翰「涼州詞」などのように平仄の規則に合っている作品を具体例として選ぶのがよい。

古典探究 発展学習 「漢詩を作る」資料編

「秋の詩」関連資料

【参考作品】

山行

唐・杜牧

遠上寒山石径斜。

遠く寒山に上れば、石径、斜なり

白雲生処有人家。

白雲、生ずる処、人家有り

停車坐愛楓林晚。

車を停めて坐に愛す、楓林の晩

霜葉紅於二月花。

霜葉は二月の花よりも紅なり

【七言絶句・麻韻】

遠く、さびしい山に登ると、石ころの多い小道が斜めに続いている。

白い雲が生じるあたりに人家が見える。

車を止めさせ、気の向くまま、夕暮れの楓（カエデ）の林の景色をめぐる。

霜によって赤くなった葉は、（旧暦の）二月に咲く春の花よりも、ずっと赤いのだ。

4 参考作品の選定および詩語の紹介

漢詩実作においては、「古人と心を通わせる」ということを強調したい。そこで、参考作品の選定が重要となる。現代の高校生にも共感できる作品で、かつ、漢詩実作の手本になるような作品を、題材別に、高校生に示せるとよい。資料②として、配布しているプリントの内容例を示した。6頁下段は「秋の詩」を実作する場合の具体例である。参考作品として、杜牧の「山行」詩を選び、掲載した。

このプリントには、加えて漢詩の助けとなる筆者のコラムもあわせて掲載した(7頁下段)。このコラムでは「秋の詩」を詠む際に生徒全員に知ってほしいことを端的にまとめ、「秋の植物」「秋の風物」「擬音語・擬態語」の項目において、適切な「詩語」をそれぞれ紹介した。

「秋を詠む詩の韻字」の項目では、秋を詠む場合に用いやすい韻目の一例として「尤韻」を紹介した。これは、例えば「起句・承句・結句」のいずれかの第七字に「秋」字を置く句を作ってみせて、他の句の七字目に尤韻の字を入れてみるという練習を行うことで、一首の完成が早くなると考え、取り入れたものである。

5 おわりに

学習指導要領の改訂により「文芸創作を指導したい」と望

コラム「秋をテーマにした詩」

○＝平字 ●＝仄字

①秋の植物

◎菊は「菊●花(きくか)」。

◎桐は「梧●桐(ごどう)」。

◎「橘●柚(きつゆう)」は、柑橘類の総称。

◎楓(カエデ)は「楓●葉(ふうよう)」。紅い楓は「紅●楓(こうふう)」。

◎「落●葉(らくよう)」も秋に合う。

◎木の実は「山●果(さんか)」。松かさは「松●子(しょうし)」。

②秋の風物

◎「蟋●蟀(しつしゆつ)」は、コオロギ科の昆虫の総称。キリギリス。「絡●緯(らくい)」は、クツワムシ。

◎「帰●鴉(きあ)」は、巣に帰るカラス。「孤●雁(こがん)」は、一羽でとぶ雁^{かり}。

③擬音語・擬態語

◎「蕭●蕭(しょうしょう)」は落葉の音や、雨や風の寂しげな音の形容。

「淅●瀝(せせれき)」は、雨・風・雪・落ち葉の音の形容。

④秋を詠む詩の韻字

◎「秋」を韻字にする場合…「秋」は「尤●韻(ゆういん)」で、同じ韻には「遊・舟・丘・流・愁」などがある。

む国語教員や「文芸創作の指導を受けたい」と望む生徒にとつて追い風が吹いてきた感はある。しかし、一方で、創作嫌いの国語教員も多い。「創作指導は、手間ばかりかかるが、それに見合った教育効果はあるのか」、「数十人の生徒にはそれぞれ『好み』があるだろう。短時間で、個別に『作りた』漢詩作品の実作を指導することは、時間的に可能なのか」という疑問もあろう。

人間の「好み」というものは千差万別である。「高校生ならば、絶対にこういう題材を好むはずだ」と決めつけることはできない。また、「高校生のフレッシュな感性を伸ばしたい」という思いはあるものの、漢詩実作の場合は、「古人と心を通わせる」ことをまず第一に考えなければならないと思う。

しかし、大人が考える以上に漢詩の本質を鋭く見抜いて堂々たる漢詩を詠むための土台を短期間で築く高校生もいる。下段は筆者が指導した都下の高校の生徒の作例である。また、漢詩を作る活動の副産物として、「漢文・漢詩を、初見で読んでも、以前よりも早く、大意や文法構造を掴むことができるようになった」「漢字にますます興味が湧いた」などの声もある。漢文学習のよい効果が得られる手応えを感じている。

過竜安寺弔真田幸村墓（東韻）

竜安寺に過ぎり真田幸村の墓を弔ふ

石庭的磔梵王宮

石庭的磔たり梵王の宮

早曉逍遙綠徑通

早曉逍遙すれば緑徑通ず

忽聴笛声多暗涙

忽ち笛声を聴きて暗涙多し

焚香懷古弔英雄

香を焚き古を懷ひ英雄を弔ふ

秋尋山寺（庚韻）

秋に山寺を尋ぬ

石磴登来眼界清

石磴登り来たれば眼界清し

一叢黃蕊受風傾

一叢の黃蕊風を受けて傾く

遠峰岩下梵音罷

遠峰の岩下梵音罷み

苔上閑聞蟋蟀声

苔上閑かに聞く蟋蟀の声

【授業実践】パズル感覚で漢詩実作——漢詩カードを用いて

高岡佑希 たかおか ゆうき

(神奈川県立逗葉高等学校)

1 はじめに

実作の授業は、指導も評価も難しいといわれる。その理由の一つは、教師自身に実作経験が乏しいことだ。それが漢詩となれば、なおのことである。教師の実作経験を問わず、生徒に実作という文学体験を通じて、漢詩の世界を感じてもらうには、どのような方法・工夫が効果的なのだろうか。

この実践報告では、生徒が漢詩を「思いがけなく作れてしまう」活動として、漢詩カードを用いた授業を紹介する。パズル感覚で本格的な漢詩が作れるツールにより、漢詩への関心を高める授業提案を行うことが目的である。

2 漢詩カードについて

漢詩（以下、近体詩を指す）には、平仄や押韻といった、漢字の「音」に関する規則がある。そうした複雑な規則を利用し、パズルのように詩語を組み合わせることで漢詩を制作するツールが、本実践で用いた漢詩カードである。

漢詩カードとは、高芝（二〇一八）^{（注1）}にて提案された、詩語

をカード化した教材である。特に詩語を主としたものを詩語カードと呼ぶ（高芝、二〇一八、四頁）。さらに本実践では、詩語は載せずに、平仄を示す記号のみを記したものを平仄カードとして加えた。

このツールの意義は、「伝統的な入門者の実作方法により近い形で、漢詩実作に触れることができる」点にある（同上、八頁）。つまり、俳句実作であれば歳時記に、漢詩実作であれば詩語表・詩語集に当たるといって、本格的な文学体験に近い学習活動を手軽に行うことができるのである。

実際に使用した詩語カードの例を図1に掲載する。カードは全六種類、すなわち、①二文字（二文字目が平）、②二文字（二文字目が仄）、③三文字（押韻・二文字目が平）、④三文字（押韻・二文字目が仄）、⑤三文字（転句・二文字目が平）、⑥三文字（転句・二文字目が仄）となる。

平字は白丸（○）、仄字は黒丸（●）、平仄両用字は三角（△）で示した。^{（注2）}また、二文字目が平字のカード（①）には



図1 詩語カード例
(番号は便宜上付した)

橙色のラベルを、二文字目が仄字のカード(②)には灰色のラベルを貼った。押韻カード(③・④)には韻目ごとに別の色のラベルを貼り、代表字(図1では「支」)を書き入れた。ただし、転句カード(⑤・⑥)には何も貼らなかつた。

本実践では、各グループに六種類のカードを十枚ずつ配付した。なお、平字・仄字カードは各四十語、転句カードは二十語、押韻カードは韻目ごとに十語作成したため、配付の組み合わせにより、多様な作品の制作が期待できる。

詩語カードの作成に当たっては、高芝(二〇一八)に倣い、『詩語完備 だれにもできる漢詩の作り方』所収の詩語を参照した。詩語は授業の実施時期に合わせ、該当する季節・時候(「秋夜偶題」)の項目を中心に選んだ。

3 単元の概要

実践報告するのは、全日制普通科高校・第一学年での授業である。授業者(筆者)には、漢詩の実作経験が(漢詩カードを除いて)まったくない。

単元(全四時・各五十五分)の展開は、次のとおりである。

第一時 平仄カードを用いた規則の確認

詩語カードを用いたグループ実作

教師による即興の訓読と意識

第二時 漢詩のきまりの確認、杜甫「春望」の鑑賞

第三時 李白「静夜思」の鑑賞、杜甫と李白について

第四時 詩語表を用いた個人実作

作品の清書と自身による意識、作品の回し読み

4 活動の実際・生徒の作品

第一時では、まず平仄カードと次の内容のプリントをグループに一組ずつ配付し、短時間で取り組みさせた。平仄カードは、第2節で説明した六種類のカード①四枚、②四枚、③二枚、④二枚、⑤一枚、⑥一枚を合わせて一組とした。ただし、平仄カードには詩語を載せていない。

丸を縦に七個、横に四列並べなさい。(二枚余る)

ア 上から二個目と四個目は違う色にすること。

イ 上から二個目と六個目は同じ色にすること。

ウ 上から一個目と三個目と五個目は何色でもよい。

エ 右から一列目と偶数列の七個目は二重丸にすること。

オ 右から三列目の七個目は黒丸にすること。

カ 右から一列目と二列目は色を逆にすること。

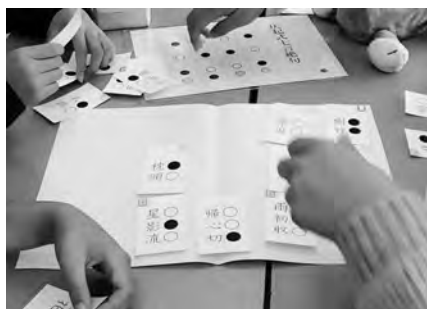


図2 グループ実作の様子

- ④ 右から三列目と四列目も色を逆にする。
 ⑤ 右から二列目と三列目は色を同じにすること。
 ※④・⑤については、上から一・三・五・七個目を除く。

これらの条件は漢詩の規則となっている。すなわち、④は二四不同、①は二六対、⑤は押韻、⑥と⑦は反法、⑧は粘法である。⑨の押韻以外は、生徒に対して詳しく説明しない。

途中で他グループへの「偵察」を許可すると、ほとんどのグループが平仄カードを並べることができるようになる。グループによつて二通りの並べ方が生じるが、実際にはどちらも正しい。それが、第一句の二文字目が平字になる平起式と、同じく二

文字目が仄字になる仄起式の違いである。

漢字には平声のものと仄声のものがあることを説明し、記号（○／●）と平仄が対応していること、平仄が分かれば漢詩をパズル感覚で作れることを確認する。また、七言詩の場合は、一句が二文字・二文字・三文字の構成になるという点も

強調しておきたい。

その後、平仄カードと引き換えに詩語カードと七言絶句の平仄パターン表（平起式と仄起式を両面印刷）を配付する。そして、パターン表のいずれかに従い、詩語カードを並べて七言絶句を作るように指示する。

生徒たちの取り組み方はさまざまである。起句の初めから順番に並べるグループもあれば、図2のように順不同のグループもある。ただし、このグループも完成作品を見ると、途中でカードを入れ替える「推敲」を行ったことが窺える。具体的には、次の傍線部が変更箇所である。

【制作途中】				【完成作品】			
樹竹	??	??	??	一面	金風	散步遊	
前庭	星影	雨初収		前庭	星影	雨初収	
□□	□□	婦心切		婦程	人語	誰家笛	
□□	枕頭	星影流		秋雨	枕頭	不可求	

さて、完成作品の共有は次の手順で行った。

- (1) 各グループの作品をタブレットPCで撮影する。
- (2) 撮影した作品をプロジェクターで投影する。
- (3) 教師が即興で訓読し、（少し大袈裟に）意識する。

先の作品（七言絶句・下平声十一尤の韻）を例にしよう。まず次のように訓読する。

一●庭●面●
 前●庭●星●影●
 金●風●
 雨●程●人●語●
 誰●家●
 散●步●
 雨●初●收●
 遊●
 枕●頭●
 不●可●求●

一面金風歩を散じて遊ぶ
 前庭星影雨初めて収まる
 帰程人語誰が家の笛ぞ
 秋雨枕頭求むべからず

続けてこんな風に意識する。

一面秋の風が吹き抜けるなか、ぶらぶらと散歩をする。
 ある家の庭を通り過ぎたとき、
 星明かりに気が付いた。

ようやく雨が止んだようだ。
 帰り道、話し声や笛の音が聞こえてくる。
 これは誰が吹いているのか。

また降り出した秋雨の音が枕元まで届く。
 もうあの笛の音を聞くことはできない。

生徒は、自分たちの作品が「それっぽく」なっていることに感動したようである。左記の第一時の振り返りからは、パズル感覚で漢詩実作ができた喜びが伝わってくる。

ただパズルをするだけでしたが、先生が訳してるのをきくとそれっぽくなっていて、うまく訳してくださってるんだろ
 うなーと思いつつも、おもしろかったです。

5 成果と課題

漢詩カードを用いた実作は、生徒たちが話し合いながら漢

詩を作る様子が見えて楽しい。もちろん教師自身が漢詩の理解を深めることは重要だが、生徒と共に作品を「それっぽく」していく過程にこそ貴重な文学体験があると感じる。

今後は漢詩を「思いがけなく作れてしまう」だけでなく、生徒がより工夫を凝らせるような仕掛けを講じたい。

本実践では、情報量を抑えるため詩語カードに大意を載せなかった。しかし、たとえば「遊子」（旅人）を人名だと勘違いする例がみられたことから、一部の詩語カードには大意を載せたほうが、生徒たちも詩語の意味を吟味して漢詩を作ることができるだろう。

また、本実践のように教師が作品を訓読・意識することは重要だと考えるが、そのままでは教師の一方的な解釈で終わってしまう。そこで、教師による意識の後に、生徒が自分たちの作品の題名を考える活動を取り入れることにより、自ら作品を再解釈するように働きかけることも有効であろう。

〔注1〕高芝麻子（二〇二）「漢詩実作教材『漢詩カード』試論——中学校・高等学校での教材として」『横浜国大言語教育研究』第
 四三号、二〇二頁。

〔注2〕詳しくは高芝（二〇二）を参照。なお、高芝（二〇二）では、詩語
 カードに書き下しと大意も載せている。

〔注3〕韻字は二重丸（◎）で示すの可。平仄カードではそうした。
 〔注4〕太刀掛呂山著、呂山詩書刊行會、一九〇年。

漢文をより身近なものに

よしざわ
吉澤 結衣

(埼玉県越谷市立武蔵野中学校)

一、授業のねらい

日本には、多くの漢文が日常生活の中に存在しています。日常生活で使う故事成語、そして、孔子や孟子の言葉は、現代に通じる人間としての生き方や考え方についての示唆を与えてくれます。高等学校の漢文の学びにつなげるためにも、私は特に、中学校学習指導要領「歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界に親しむこと」「長く親しまれている言葉や古典の一節を引用するなどして使うこと」を中心に指導し、漢文をより身近なものとして捉え、生徒が古典・漢文に関連する言葉を自己表現のための言葉として使うことができるよう、意識しています。

二、授業の方法(教材)

中学校一学年では、「故事成語」で漢文に初めて触れます。このとき、教科書で出てくるのは「矛盾」のみです。この故事を使い、漢文の基礎知識(白文・訓読文・書

き下し文、返り点、置き字など)について学びます。再説文字などは中学校では扱う必要はありませんが、文法的な意味は高校で学習すると伝え、有名な故事成語や漢文を例に出して紹介するにとどめています。

さて、漢文をより身近なものにするためには、内容を理解し、自分の身に置き換えることが必要だと考えます。一学年の「故事成語」を例にしますと、①故事成語を用いて体験談を書かせる②故事や故事に沿った話を作り、劇として紹介する③故事成語を用いた四コマ漫画を描き、発表するなどの言語活動を取り入れることができます。

体験談については、「蛇足」のように故事が分かりやすいもの、「助長」のように語彙として取り入れやすいものを教師が選び、生徒に提示します。そして、選択した故事成語についてルールに沿った文章を書かせ、故事成語の故事や意味と一緒に ICT を活用して共有します。短い文よりも体験談の方が生徒の関心が高く、より故事成

語が印象に残ります。さらに、印象に残った文章を分野別に投票させ、印刷して全作品掲示すると学習掲示として活用できますし、生徒の自己肯定感を養うことにもつながります。漢文の読み方だけではなく、漢文がこの時代に残っている理由や意義を実感させることが、漢文への関心や理解につながるのだと思っています。

三、生徒の反応

訓読の方法を学び、「漢文は難しいものだ」という考えをもっている生徒もいましたが、「内容を理解すると面白い」という生徒がほとんどでした。そして、故事成語の由来や時代背景を知ると、さらに関心をもっていました。

漢文はまさに、「今に生きる言葉」であるということを実感させること、内容理解に必要な知識に加え、当時の中国の歴史や漢文に関わる話を知り、漢文の面白さを実感させることが、中学校の漢文教育で必要なのだと思います。

お詫び
『漢文教室』二〇八号掲載の鈴木敏先生のご実践は、二〇二一年全国漢文教育学会でご発表された旨、記載が漏れておりました。お詫びして追記いたします。

【授業実践】「山月記」を読んで七言絶句を作る

岡本利昭 おかもととしあき

(神戸大学附属中等教育学校)

1 はじめに

教室で作詩をする際、作詩の動機づけが難しい。指導者が漢詩（近体詩）の規則を説明し、平仄などの規則を理解するのは、生徒にとってそれほど難しいことではないと思う。だが、「何のために詩を作るのか」という動機が確かでない、充実した有意義な表現活動とはならないように思う。「学習指導要領」も「読むこと」の言語活動例として漢詩を作ることを挙げているのが、その証左である。漢詩を作るといっても、漢詩を作ること自体がそもそもの目的ではない。作詩はあくまでも、国語科の学習のなかで生徒たちが、現代の国語を豊かなものとするための手段であるにすぎない。

2 「山月記」をつかって

中島敦「山月記」は高等学校国語教材の定番といつてよい教材であり、指導する教員にとってもなじみが深い教材である。作品中に、李徴が袁修えんしゅうに送る詩（七言律詩）が登場する

ことは多くの方がご存じであろう。詩は李徴が袁修に対して、自己の不運を吐露する際に、非常に効果的な役割を果たしている。

これは一旦、作者の表現の工夫であるということを離れて考えてみると、李徴から袁修への贈答詩（贈詩）と考えられないこともない。本稿では、「山月記」を読む単元を終える際のまとめの表現活動として、「山月記」を読み終えた生徒が、袁修の立場に立ち、李徴に対して答詩を作る活動を行った報告を行いたい。従来から、「山月記」を読み終えた後のまとめの表現活動は、諸賢によってさまざまになされているが、生徒が袁修の立場に立つて答詩するのは、詩を作る際の動機が明確になると考えたからである。

3 詩歌の贈答をする

普通、詩を贈られれば、贈られた詩に答詩することが一般的である。「山月記」では李徴、袁修ともに非常な秀才とし

て描かれているが、袁傜が旧友の李徴から詩を贈られ答詩していないのは、士大夫としては考えてみれば異例である。そこで、袁傜の立場に立つて李徴への答詩を作ることにした。生徒は附属中等教育学校五年生（高校二年に相当）一〇九名であり、作詩法を約二時間で速習してから、作詩することにした。和歌を贈答する際のきまり（しきたり）については、日本古文の学習の中である程度、生徒たちも理解している。しかし、「漢詩の贈答の際には、どのようなしきたり（方式）に従って詩を返すのか」を生徒に聞いてみても、即答する場合はまれである。

ただ、「漢詩の詩としての特徴に留意して想像してごらん」と発問すると、多くの生徒から「韻に工夫をする」という答えを得ることはできた。韻を踏むことこそが、詩を詩たらしめているということが、生徒の答えからもわかる気がした。

漢詩には「和韻」というきまりがあり、贈られた詩に使われているのと同じ字、もしくは同じ韻目で返すことが求められる。つまり、答詩を行う場合、贈られた詩の韻目や韻字に注目して（もちろん内容にもだが）詩を返すことになる。

次の例は、『蕉堅藁』中の七言詩である。絶海中津（二三六「四互」が入明中、四十二歳の時に、高皇帝（洪武帝 朱元璋）に謁見を許され、詩を献じた時のものである。

応制賦三山

絶海中津

熊野峰前徐福祠。

満山菓草雨餘肥。

只今海上波濤穩

万里好風須早帰。

御製賜和

高皇帝

熊野峯高血色祠。

松根琥珀也應肥。

当年徐福求仙藥

直到如今更不帰。

絶海中津と高皇帝との贈答詩は和韻されており、韻目は「用」である。ただ、一口に和韻といっても、「依韻」「次韻」「用韻」の三種類がある。まず、①贈られた詩と同じ韻目の文字を使うが、贈られた詩と「同じ字」を使わないのが依韻。次に、②贈られた詩と「同じ字」（韻字）を贈られた詩の順序通りに用いなければならぬのが次韻。さらに、③贈られた詩と「同じ字」（韻字）を用いるが、贈られた詩の順序通りに用いなくてもよいのが用韻である。

4 指導・実作・添削の実際

作詩法の習得にはおよそ二時間をかけた。参考書として『だれにもできる漢詩の作り方』（太刀掛呂山）を使用し、送別の部分を詩語表として提示し、そのあと直ちに実作に入った。ただ、今回生徒は初学でもあり、和韻は用いなくてもよい（もちろんできるならば、用いてもよい）と指導した。

送別	関山	十里	十分奇	暗溪	千里	別
東都	分袂	別離期	振羽	行飲	日	
交情	赴任	有誰知	輕別離	看不目		
謝老	交誼	寸心知	凍魚	偏情別		
多年	停馬	旧相知	彼此辭	遙舍命		

実際に配布した詩語表（部分）

生徒が実作を始め、作詩で疑問や困難に直面するとき、他の生徒の例を教室全体で共有することが有効である。

実際、作詩を始めると、早い生徒では約一時間で作品を仕上げた者もいたため、実作に入って二時間目は、早くできた生徒の作品をスクリーンに投写し、解説や添削を加え、クラス全体で共有することで、まだ完成していない生徒の作詩に役立てるように配慮した。

次の例はある理科系の生徒の作品である。

山中満月照輕塵

失意同窓淚色新

日出迫来今生別

忍悲早發遠行身

山中満月輕塵を照らし

失意の同窓淚色新なり

日は出で迫り来たる今生の別れ

悲を忍び早に發す遠行の身

塵・新・身と押韻（韻目塵）できており、平仄その他にも間違いがない。ただ、一読して明らかのように、既習教材「送元二使安西」の焼き直しと言えるだろう。送別詩の典型的名作が、「送元二使安西」であると授業中に触れたことがあり、生徒本人に確かめると、王維の句を意識して作詩したということである。他の複数の生徒からも、学習した漢詩や句法（受身・使役・願望）の学習知識が活用される傾向が見てとれた。

次に別の生徒の作品をあげる。

故人細話暗淚垂

離別哀哀不勝悲

一叫咆哮躍身去

於菟杳渺千里馳

故人の細話 暗淚垂る

離別 哀哀として 悲しみに勝へず

一叫 咆哮して 身を躍らせて去り

於菟 杳渺として 千里に馳す

この生徒も早く完成したが、最初は起句で「握別」、転句「躍身別」で、同字重複であった。同字重複は実作の機会に例を示していかなければ、生徒には気づきにくい禁忌である。教室全体で問題点を共有し、推敲を促し、作品のような表現になった。ここで、注目したいのは、この生徒に限らず、問題がある部分を指摘すると、生徒は推敲する際に、「山月記」

の本文自体に、よりふさわしい表現や語彙を求める傾向があることである。転句は初め「意気揚々躍身別」であったものが、「一叫咆哮躍身去」と推敲されてきた。これは一見して「山月記」本文の表現や語彙を参考に行っていることに気づかされる。作詩を通して、より深く原作の作者の表現の特徴や工夫を読み取るうとしていくことがわかる。

最後に和韻詩である。

驪歌揮淚北風号

無限詩魂万里韜

交誼迢迢常不斷

虎身自愛酌濁醪

驪歌 涙を揮へば 北風号す

無限の 詩魂 万里に韜る

交誼 迢迢なれども 常に断たれず

虎身 自愛せよ 濁醪を酌む

〔要〕韻で、李徴詩に答えている。結局、和韻詩を作った生徒は十名、すべて依韻であった。

5 生徒作品からわかること

先にも述べたが、生徒が作詩する過程で表現に困ったとき、明らかに「山月記」の表現や語彙が使用されることが多いことがある。「山月記」の中の表現や語彙(熟語・地名など)が使われた例は全部で二十五首確認できた。自分の詩の表現

を考え、語の選択に迷うとき、生徒は「山月記」の表現に戻ってきている。今回の漢詩の創作は、袁儻から李徴への答詩という形をとっているが、それは一種の「山月記」の続きを書くことでもある。続きというテキストの空白を埋めようとするとき、当然ながら作者の創作意図や表現の工夫を作者の立場に立つて、自分なりに深く読み取らなくてはならない。それは、「山月記」を「読む」ということにほかならない。今回の場合も漢詩という媒体に自分の読みを投影するためには、生徒は、より深く元のテキストである「山月記」を読み込まなくてはならなかったのではないだろうか。

最初に述べたとおり、作詩はあくまでも、生徒の現代の国語の力を高め、豊かにしてゆくための手段である。目的は「山月記」というテキストを読み、「読み」を深め、味わい、自己の表現力を高めることである。そう考えるとき、この実践に關していえば、作詩に際して、「必ず、作品中の表現や語彙を作詩に反映させること」という制約を課してもよいように思った。また、学習した知識や句法などを織り込むように指示しても有効だろう。これは既習の知識の活用を促すことにつながり、PISA型学力の育成にもつながる。諸賢のご意見を賜りたいところである。

*参考文献 朝倉和「五山文学における『和韻』について」(『国文学』179 二〇〇三)

漢詩作りをサポートする

『漢詩創作のための詩語集』

長きにわたって漢詩研究、漢詩実作指導に尽力された石川忠久先生が去る二〇二二年七月十二日に九十歳にて逝去されました。同じ月に小社より刊行された先生の新刊『漢詩創作のための詩語集』をここに紹介します。



石川忠久 監修
A5 判上製・函入・704 頁 定価 6930 円（税込）

■これまでにない詩語集を

漢詩実作の普及に尽瘁しておられた石川先生は、かねて詩作に役立つ詩語集の刊行を期されていたところ、『石川忠久漢詩の稽古』（二〇一五年、小社刊）の読者の方々から「次はぜひ詩語集を」という具体的な声を受け、詩語集の刊行を企画されました。先生の主宰する櫻林詩會にて直接の指導を長年受けられた七名の方々を編集委員とし、編集会議が始まったのが二〇一六年のことです。

会議では、和習（日本語的な表現）や禁則の詩語を収録しないこと、一つ一つの詩語に平仄はもちろん読みと語義も記載すること、現代に生きる日本人が詠みたい詩を作れるよう現代的・日本的な詩語も収録すること、検索しやすい索引を完備すること……等々、それまでの詩語集では必ずしも十分になされていなかった点が確認されました。そしてこの詩語集ではそれらを実現できるようにしようという目標が掲げられ、約六年にわたる編集委員の執筆・編集を経て、延べ二万五千語の詩語集本編、六種の目次・索引、四つの付録を収録する『漢詩創作のための詩語集』が編まれました。

■漢詩の作法にかなった、多種多様な詩語を収録

採集・執筆された詩語原稿は三万五千に及びましたが、石川先生の求める厳格な採録基準に沿って、最終的に延べ

上平声		
一東		
丁東	○○情 155c	黄童 ○○事 245a
朝東	○○情 119a	卯童 ●○事 245a
江東	○○地 356b	牧童 ●○情 127d
遼東	○○地 357a	駮童 ●○事 245a
向東	●○情 145d	似兒童 ●○○雜 339a
日東	●○地 363a	問小童 ●●○事 176b
正東	●○情 145d	念牧童 ●●○情 128a
海東	●○地 363a	家僮 ○○事 248b
洛東	●○地 369c	吳中 ○○地 360c
浙東	●○地 360b	義中 ○○事 224c
溫東	●○地 365c	城中 ○○情 128a
駿東	●○地 367c	廬中 ○○事 273a
野橋東	●○○情 134a	襄中 ○○情 146b
倭西東	●○○事 312d	庭中 ○○事 231c
厭西東	●○○事 181c	心中 ○○事 285d
各西東	●○○情 147a	愁中 ○○事 287a
水西東	●○○情 118c	書中 ○○事 299b
	119c	林中 ○○情 71a
自西東	●○○事 181c	樓中 ○○事 225a
白雲東	●○○情 146b	樊中 ○○雜 338a
湖水東	●○○情 121b	機中 ○○情 127c
滄海東	●○○情 123a	炉中 ○○歳 46b
蘭渚東	●○○情 110b	煙中 ○○情 56c
		窓中 ○○事 227d

▼五十音索引(巻末102ページ)

きみわらうことなかれ 君勿笑 346a
 君莫笑 346a
 きみをあわれむ 憐君 294d
 きみをおくる 送君 281c
 きみをおもう 念君 295c / 思君
 295c / 想君 295c / 憶君 295c /
 懷君 295c
 きみをおもうころ 懷君意 296a
 きみをおもうところ 思君処 296a
 きみをコクす 哭君 263c
 きみをしることおそし 識君遲 275c
 きみをたずぬ 尋君 278a
 きみをとどむ 留君 281c
 きみをとどめてよわしむ 留君靜
 283b
 きみをみず 不見君 285a
 きみをゆめむ 夢君 217c
 きみをロウす 勞君 294d
 きみをわずらわす 煩君 294d
 キム 帰夢 252a / 應夢 265a
 キむすがごとし 氣如蒸 63a
 きもをやぶる 破胆 291d
 キモン 旗門 323c
 キャクカイのひ 却回日 253b
 キャクゲツ 却月 90a

二万五千の詩語が選定されました。また当初、「初春の植物に関する詩語」「仲秋の天候を表す詩語」などと季節で大まかに分類して詩語を並べる予定が、非常に多種多様な詩語が集まったため、「歳時」「情景」「人事」「雑」「地名」「人名」の六つの部立のもと千二百に及ぶ分類がなされることになりました。「人事」部の「離別・送別」や、「雑」部の「疑問・反語」など、それぞれの分類ごとに漢詩に特有の表現が並ぶこととなり、詩語集であるとともに漢語の類語辞典としても活用してもらえものになったのではないかと思います。

■求める詩語に出会える便利な索引

目次・索引は、たくさん詩語の中から求める詩語に到達できるよう便利で使い勝手のよい形が検討されました。意味の分類から検索する「分類一覧」、末字が平声である詩語を韻目から検索する「韻目索引」、詩語の読みによって検索する「五十音索引」、対句を考える際に役立つ「双声索引」「置韻索引」「重言索引」の六種が収録されています。特に「韻目索引」は、押韻に使える詩語をその韻目・韻字・平仄パターンによって配列したもので、韻を踏む詩語の候補を一覧することができ、詩作を深める際の一助になることと思います。この韻目索引の配列も、できるだけ詩作の場で使いやすいようにと、漢字の部首や画数などにも配慮した種々の配列規則を検討し、最善と思われる形になりました。

■作詩をサポートする付録を収録

また、これから漢詩創作に挑戦しようという方たちの助けになるよう、「作詩指南」と題して、「和習を避ける」「異称を活用する」「故事を用いる」「詩題を整える」という四つの付録が設けられました。それぞれの要点を簡潔に解説し、さらに「和習の例」「動植物の異称」「故事一覧」「題詠詩題一覧」という資料を収録しています。

「故事一覧」は、作詩の参考になる故事を百余り掲げ、その故事を踏まえる詩句を用例として紹介するもの。「題詠詩題一覧」は、石川先生の主宰する詩会（櫻林詩會）で実際に課題として出されたものを中心に、五百二十余の詩題を紹介するものです。各詩題の関連欄には、その詩題で詠むときに参照するとよい本詩語集の分類名とページが記されています。何を詠んだらよいのかわからないという人もこれらを手掛かりにして作詩に挑戦してほしいという思いが込められた付録で、三十年以上にわたって先生の詩会で毎月出されてきた詩題が、一月〜十二月の各月ごとに紹介されています。漢詩の歳時記としても眺めることができ、一年を通してその時々によさわしい漢詩のテーマに出会えることと思います。

そのほかの付録として「七言絶句記入表」を掲載。教室での作詩実践の際などにこの表を活用いただけたらと、開きやすい巻末に印刷されました。

▼故事一覧（397ページ）

曲肱（ヘキョクコウ）

清貧の暮らしの喩え。▼粗末な食事をし、^枕を枕の代わりにするような貧窮の中にも楽しみはあり、不正によつて得た富貴は自分には浮雲のようにはなく無縁のものだ、と言った孔子の言葉から。（論語・述而）^詩居常待其尽、曲肱豈傷冲（陶潜・五月旦作和戴主簿）

▼題詠詩題一覧（437ページ）

送友再遊（へともものサイユウをおくる）

友が再び旅に出るのを送る ^{関連}離別・送別 281 / 交友 276

／旅行・長旅 178

新涼読書（シンリョウドクショ・シンリョウショをよむ）

初秋の涼しさの中で読書 ^{関連}秋の到来 30 / 初秋の時

節・天候 38 / 書物・読書 202

■より実践的な入門書を今春にも刊行

『詩語集』が一つの形となり、それに続く企画として本書編集委員による『はじめての漢詩作り入門（仮題）』を今春の刊行を目指して準備中です（本詩にも寄稿されている岡本利昭先生による授業での実践提案も掲載予定）。『詩語集』や

石川忠久先生 2015年12月、櫻林詩會席上にて水出和明撮影



漢和辞典を活用しながら「まずは一首作ってみる」ということを目標に掲げた記入式の教材で、文法に則って適切な漢文を作ったり、漢詩の基本ルールに沿って詩語を考えたりと、練習問題を解きながら詩作に必要な基本事項を学んでいくものです。多くの人に漢詩作りを楽しんでほしいという石川先生の思いを『詩語集』や入門書の刊行を通じてお届けすることができたと思う次第です。

▼入門書に収録予定の問題

問題 次に挙げた和習の語を、詩語集や漢和辞典を調べて「詩語」に書き換えてみましょう。

花火 「 」 朝顔 「 」

問題 次の日本語を漢文にしてみましょう。

野の梅が香しい ☐ ☐ ☐

問題 次のルール違反の七言句を、カッコ内の句意を参考にして正しい語順に改めてください。

但長江見送流水 ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐

(ただ長江が流水を送り続けるのを見るだけだ)

櫻の林の満開の下 追悼 石川忠久先生

水出みずいで 樂山らくさん水すい

坂口安吾から苦情が出そうな題名ですが、石川岳堂先生が

櫻美林大学御在職中に漢詩結社「櫻林詩會」を御創設なさり、その爛漫たる櫻の林の下で、長らく懇篤な御指導に尽力されましたもので、自らこの題名となりました。坂口安吾の父親の坂口五峯は漢詩人でしたから、漢詩に免じてこの題名を勧め併してくれることでしょう。この詩会については、先生の御高著『石川忠久 漢詩の稽古』（大修館書店、二〇一五年）の序文中に解説がありますので、詳細は同書を御覧下さい。

詩会発足以来、約四十年間、実に様々な教えを賜り、深く感謝致しております。このたびは、学徳・人徳・文徳と三拍子そろった石川先生を偲びつつ、「岳堂師匠のカラウタ・メソッド」の一端を御紹介致します。

漢詩に限らず、詩歌制作には種種の約束事があり、それらを守る必要があります。漢詩の場合、押韻、二四不同、二六対、孤平、下三連、同字相犯等の諸規則がありますが、漢詩という以上は漢字・漢語を使用します。和語は絶対に使えま

せん。

「漢詩は昔の中国語で作るもので、日本語の歌ではないから、漢語は勿論、ある程度の漢文法の素養が必要だね。」

とのお言葉は、当然のことです。

「題材は何を詠いても良いけれど、最初は四季おりおりの題詠で腕を磨くべきだね。これはテニスや野球の選手がラケットやバットの素振りをするのと同じで基礎練習だよ。素振りもろくにできない選手が試合に出られるわけがないだろう？」

との御教示も尤もです。

「漢詩は絶句、律詩、古詩と色々あるけれど、どの形式であれ構成をよく吟味することが大事だね。」

この御指摘は起承転結の重要性を説かれたもので、どの形

式にても結局はこの原理に帰着します。この原則を守らない作品は、何を言いたいのかわからず、

「これは支離滅裂ならぬ詩理滅裂だねえ。」

となります。

通常、漢詩の作詩はよほどの天分や漢文の豊富な素養がない限り、七言絶句から始めます。これは四行詩で、起承転結の法則がよく適合します。

起句は作品全体の大まかな舞台を設定し、承句以降の雰囲気を示します。その際、最初の二文字が重要ですが、大上段にふりかぶったり、氣ばったりせず、自然に入ります。

「起句は、なにげなくサラリと入るのがコツだよ。」

承句は、これを承けて後半が生きるように伏線を張ります。伏線である以上、すぐに悟られては駄目で、さりげなく工夫をしかけますから、承句は自己主張ができません。転結を際立たせるための準備を秘かに設定する立場なので、自分が目だつてはいけないのです。

「承句は、すました顔してサラリと承けるといいね。」

転句は前半を踏まえつつ、「あれ?」と思わせるような意外性を打ち出します。転句という以上、ここは思いきりよく

鮮やかに転回します。

「転句は、大胆にガラリとかわるべきだね。」

結句は千両役者が大見得を切るようにバシッと決めて、威風堂堂と退場します。いわば決めぜりふで大向こうをうならせる役まわりですから、多少は気障きざになったり、大げさになったりしても構いません。

「結句は、かつこよくピシャリと決めたいものだねえ。」

結句は結論部分なので、いくら名文句ができて前半と齟齬そごをきたしては意味がありません。それは「四分五裂」ならぬ「詩文五裂」の状態です。起句の最初の二文字と結句の下三文字があい呼応していれば、その作品は正解と言えます。前半と接せず、転句で飛躍するののみま、結句できちんと結論づけをしないと、非合理的な詩となります。その場合、

「この漢詩は、頓珍漢詩だなあ。」

と言われてしまいます。

以上、サラリと入り、サラリと承け、ガラリと転じてピシャリと決める、というのが極意です。

「これをね、おしりの法則と言うんじゃよ、ハッハッハッ。」

最初、「おしりの法則」とは何のことか意味不明でしたが、サラリ、サラリ、ガラリ、ピシヤリは皆「リ」で終わり、その数は四つです。「四り」に「お」をつけて「お四りの法則」という洒落でした。先生は結構冗談を解する一面もありで、頭の固い昔の漢学者とは違います。

この「お四りの法則」を守れば、理の通った作品にはなりませんが、基礎練習が必要です。

「初心者が上達するにはね、三多^{さんた}がいいよ。」

「三多」とは「多読・多作・多商量^{しりようりょう}」のことで、元来は歐陽脩^{ようしゅう}の言葉です。漢詩に限らず、文藝作品は多く読み、多く作り、多く推敲することが肝要です。「四り」とあわせて「四り・三多」の原則を実行すれば、誰でも一廉^{ひとかど}の漢詩人となりえます。

「まずは七言絶句を百首作ってごらん。そうするとね、見えてくるものがあるよ。」

勿論、数量よりも質的水準が問題ですが、二、三十首程度では質がどうこう言えるような段階にすら達しません。草場^{くさば}佩川^{はいせん}の詩中に、「山に登るは恰も書生の業に似たり 一步歩高くして 光景開く」という句があります。これは学問修養を登山に譬えた比喻ですが、作詩にも通用します。一歩登

れば一歩分だけ周囲の景色が展開するように、一首作れば一首分の境地が開けます。百首作れば相当の高みに至り、第一首めの景色とは全く異なる広大かつ高雅な眺望が開けます。詩文・書画・音楽は三位一体で、分野は違えど行きつく先は同じ幽雅の世界です。漢詩作りで閑雅の境涯に遊べば、日常生活が詩情に富むものとなります。

「みんなが詩を作って風雅を楽しめば、戦争も迫害も起きるわけがないやねえ。」

日本古来の風雅の本道を世上に広く普及させ、後世に伝えることが、石川先生の願いでありました。貴方もこの実現に協力して下さると、必ずや先生もお喜びになれることでしょう。改めて先生の御冥福をお祈りするとともに、この願いの成就を心から願ってやみません。

哀悼 石川岳堂先生長逝 石川岳堂先生の長逝を哀悼す

惆悵 恩師去不同 惆悵 恩師の去りて回らざるを

東籬空見菊花開 東籬に空しく見る 菊花の開くを

先生笑道九天上 先生 笑って道う 九天の上

好與淵明酌玉杯 好し 淵明と玉杯を酌まんと

陶淵明をめぐる五つの断章・その一

「園田」の境地

坂口三樹
(文教大学)

陶淵明(三六五―四二七)の生きた晋・宋の交替期は、知識人の視線が山紫水明の景勝地、当時のことばでいえば「山水」に注がれた時代であった。夥しい数の「山水遊記」が書かれ、謝靈運(三八五―四三三)に代表される山水詩が勃興したことは、その見やすい証拠である。宗炳(三七五―四〇六)などの山水画がもて

はやされたことも、その証左の一つに数えられよう。さらには、『晋書』や『宋書』の「隱逸伝」に、しばしば「性 山水を好む」といった記述が見えるのも、こうした時代の思潮を示しているといえようか。かかる「山水」愛好の時代にあつて、陶淵明が文学活動の拠点としたのは「園田」であつた。当時の時代思潮の中にあつて、陶淵明が依拠した「園田」とはいかなる空間として位置づけられるのか。代表作の一つである「歸園田居(園田の居に帰る)五首」の「其一」を例に検討してみよう。

義熙元年(四〇五)、最後の官職となつた彭澤県令を辞して郷里の尋陽(江西省九江市)に帰つた淵明は、その翌年の春から夏にかけてこの五首の連作を制作したとされる。なかでも「其一」

は連作全体の総序的役割を担つていて注目には値するが、その冒頭は「少無適俗韻、性本愛邱山(少くして俗に適する韻無く、性本邱山を愛す)」とうたい出される。この「性本愛邱山」の句は、『宋書』隱逸伝などに散見された「性好山水」の記述と類似した表現で、これだけを見れば淵明も同じく山水愛好の思潮を体現した存在のように見えるが、しかし彼が居を構えたのは「山水」ではなく、あくまでも「園田」であつた。その風景を、淵明は次のように詠じている。

方宅十餘畝	方宅 十餘畝 ^ほ
草屋八九間	草屋 八九間 ^{はちくげん}
榆柳蔭後簷	榆柳 後簷を蔭ひ ^{おほ}
桃李羅堂前	桃李 堂前に羅なる ^{つら}
曖曖遠人村	曖曖たり 遠人の村
依依墟里煙	依依たり 墟里の煙 ^{いぬ}
狗吠深巷中	狗は吠ゆ 深巷 ^{しんかう} の中 ^{うち}
雞鳴桑樹巔	雞は鳴く 桑樹の巔 ^{いただき}

「方宅十餘畝、草屋八九間」とは、『晋書』吳隱之伝に「數畝の小宅にして、籬垣は仄陋、内外に茅屋六間のみにして、妻子を容れず。」とあるのを勘案すれば、ようやく家族を養えるほどの小ぢんまりとした家屋敷をいうのであろう。続く四句は、そうした「園田の居」のたたずまいを、近景から遠景への自然な視線の移動のうちに描き出す。屋内から前庭そして遠くの村落へと、均整の取れた対句によって描き出されたその風景は、作者の精神のあ

りようをも示しているかのようだ。「依依」として棚引く「墟里煙」は、民衆の日々の暮らしを象徴する炊事の煙であろう。ここに描かれているのは、どこか懐かしい農村の日常の一コマなのである。次の「狗吠深巷中、雞鳴桑樹巔」の二句も、いかにものどかな農村の情景を描いたかに見えるが、これは実景というよりは多分に観念的な風景である。この句が、古樂府「雞鳴」（『樂府詩集』卷二十八）の「雞鳴高樹巔、狗吠深宮中（鶏は鳴く高樹の巔、狗は吠ゆ深宮の中）」に基づくことはよく知られているが、「雞鳴狗吠」のこの情景は、『史記』律書に漢の文帝の治世を述べて「鳴鶏吠狗、煙火万里にして、和楽と謂ふべき者か。」とあるごとく、太平和楽の世を象徴する表現である。そしてそれは、『史記』貨殖列伝に『老子』の言として「至治の極みは、隣国相望み、鶏狗の声相聞こゆるも、……老死に至るまで相往来せず。」と見える、『老子』第八十章に基づく表現なのである。つまり、この二句はそれまでの「園田」の風景を承けて、そこに『老子』の描く太古の原始共同体的農村のイメージを付与せんがため、古樂府の句を援用して仕立てられたものではなかったか。しかも、「高樹」を「桑樹」に、「深宮」を「深巷」に改めることで、より農村風景としての具象性を帯びることとなる。それまでに描かれた眼前の「園田」空間が、この二句によってそのまま『老子』の描く太平和楽の村落風景と二重写しになるのである。

かかる風景の描き方は、淵明とほぼ同時代の謝靈運のそれとは著しく異なる。次に、謝靈運の山水詩の代表作である「過始寧墅

（始寧の墅に過る）」から、叙景部分の白眉を示す。

山行窮登頓

山行して登頓を窮め

水涉盡洄沿

水渉して洄沿を尽くす

巖峭嶺稠疊

巖は峭しくして嶺は稠疊たり

洲繁渚連緜

洲は繁りて渚は連綿たり

白雲抱幽石

白雲 幽石を抱き

綠篠媚清漣

綠篠 清漣に媚ぶ

「山行」「水渉」する詩人の移動にともなう、視線の激しい上下動のうちに深山幽谷の奇観が次々と展開する。これはまさしく山水を愛好する遊覽者の眼によって発見された風景というべきであろう。さればこそ、山水愛好の氣風の満ちる当時であつて、その詩は「一詩の京邑に至る有る毎に、貴賤競ひて写さざるは無し。」（『宋書』謝靈運伝）という圧倒的支持を得たのであつた。それに対して、淵明の描く風景はどうであつたか。先掲の「園田」の描写は、謝詩の遊覽者の視線とは異なる、定住者の眼差しが捉えた風景とでも呼ぶべきものであつた。そもそも「山水」とは、貴族や隱者がそこに居を構えようと、「山水を好む」彼らにとって所詮は遊覽・賞翫の対象でしかなかった。しかるに淵明が依拠した「園田」は、人間の日常生活の場なのであつて、この点で「山水」とは次元を異にする空間であつた。

生活の場である「園田」に立脚して、陶淵明は日常の生活を手触り確かに描いて見せた。それは淵明にとって、自己の生の意味を問ひ続ける営為でもあつた。

◆大修館書店 新課程教科書のご紹介

大修館書店の「古典探究」

豊富な教材と資料で、古典を主体的に楽しく学ぶ教科書

「言語文化」に引き続き、令和五年度から「古典探究」の授業が開始されます。これまでの「古典B」「古典A」とは何が違うのか、「探究」とは何をするのか、戸惑うことも多いのではないのでしょうか。

大修館書店の「古典探究」は、そうした疑問にお応えし、生徒が主体的に学ぶための工夫が満載の教科書です。

『古典探究 古文編・漢文編』

『精選 古典探究』

- ①入試を見据えた教材化と、
充実の読み比べ教材
- ②探究学習に取り組みやすい構成
- ③高校生の疑問に答える充実のコラム
- ④理解を促す多彩な図版

教科書の特徴

[古探 706]



『古典探究 漢文編』
A5判・204ページ

[古探 707]



『古典探究 古文編』
A5判・294ページ

充実の教材が 176 本！
古文、漢文だけでなく、
現代文の教材も多数収録して、
古文の読解を深めます。

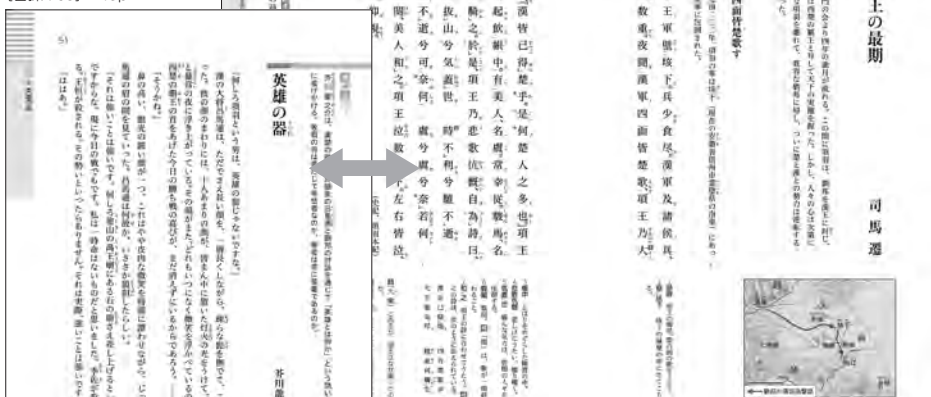
[古探 708]



『精選 古典探究』
A5判・406ページ

一冊でも充実の教材数。
古文、漢文だけでなく、
現代文の教材も収録して、
古文の読解を助けます。

[古探 707] 51p、
[古探 708] 245p



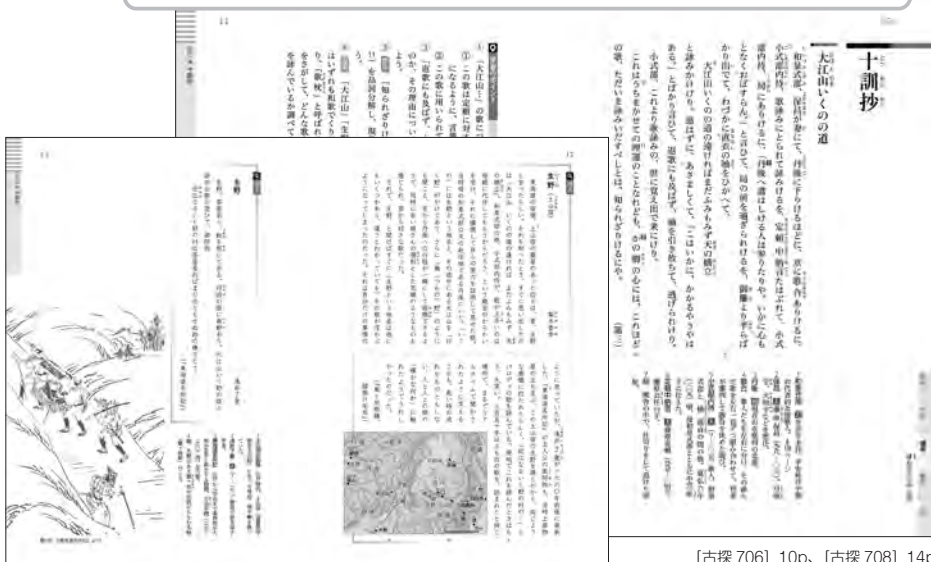
①入試を見据えた教材化と、充実の読み比べ教材

教材の理解を深めるための教材「読み比べ」「視点」を新設。

漢文×現代文、古文×漢文、古文×古文……など、さまざまな教材を組み合わせて読み比べ、教材の理解を深めます。

古文・漢文教材の江戸時代のパロディ作品や、現代の人気作家のエッセイ、専門家による解説文まで多種多様な文章を掲載しています。

複数の教材を比べて読んで課題に取り組む学習は、大学入学共通テストなどの試験対策としても活用できます。



[古探 706] 10p、[古探 708] 14p

[古探 706] 12p、[古探 708] 16p

掲載ページはすべて『古典探究 古文編・漢文編』と『精選 古典探究』の共通教材です。

[古探 707] 34p、[古探 708] 232p

[古探 708] 3

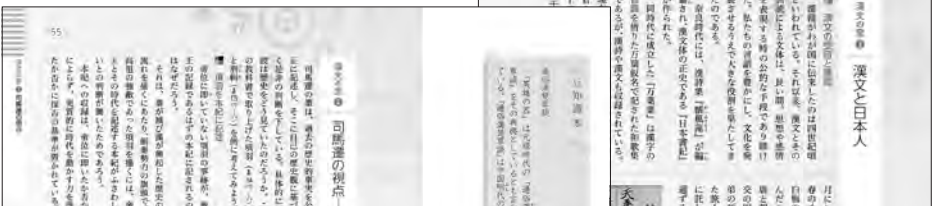


②探究学習に取り組みやすい構成

「探究学習」を授業に取り入れやすくする課題や、課題に取り組むための補助となる図解資料、コラムを充実させました。

巻頭には調べ学習に役立つ「古典を探究」を設けるなど、自主学習のためのヒントが満載です。

[古探 707] 55p、[古探 708] 249p



③高校生の疑問に答える充実のコラム

古文漢文の基礎知識をまとめた「古文の窓」「漢文の窓」のほか、古典にまつわる疑問に答えたり、生徒の興味を引き出したりするコラム「豆知識」を設けました。「豆知識」では関連図書の紹介もしています。



[古探 707] 86p、[古探 708] 276p



④理解をうながす多彩な図版

言葉では説明が難しい地理や人物関係が一目でわかる図版資料や、作品や作者のつながりの理解を助ける図版資料が充実!

「古典B」で好評だった古文の時代スケールに加え、漢文の時代スケールを新設。作品の成立年代と、作品に描かれたできごとが起こった時代を一目で把握できます。

[古探 707] 18 p、[古探 708] 26 p

[古探 707] 192p、[古探 708] 375p

[古探 707] 186p、[古探 708] 371p

重要漢字一覧

186

漢字	読み	意味
一	イチ	一つ、一回、一度
二	ニ	二つ、二度
三	サン	三つ、三度
四	シ	四つ、四度
五	ゴ	五つ、五度
六	ロク	六つ、六度
七	シチ	七つ、七度
八	ハチ	八つ、八度
九	ク	九つ、九度
十	ジュ	十つ、十度

重要句法一覧

371

句法	読み	意味
一	イチ	一つ、一回、一度
二	ニ	二つ、二度
三	サン	三つ、三度
四	シ	四つ、四度
五	ゴ	五つ、五度
六	ロク	六つ、六度
七	シチ	七つ、七度
八	ハチ	八つ、八度
九	ク	九つ、九度
十	ジュ	十つ、十度

古文・漢文読解の基本が身につく
古文・漢文の読解の基本となる文法や句法を学ぶための資料を付録にまとめて収録しています。
古文では、文法事項を押さえるための課題も掲載しています。

大修館書店の古典が学べる教科書

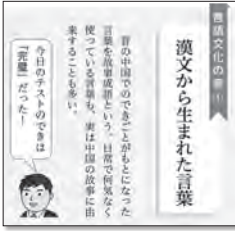
必修科目

『言語文化』



[言文 705]
A5判・364ページ

古典×現代、日本×世界、
タテとヨコ、二つの軸で言葉
と文化を考える。
広い視野で学べる教科書です。



漢文学習への意欲を高める
コラムを複数設けていま
す。

選択科目

『新編 文学国語』



[文国 705]
A5判・398ページ

「文学国語」の教科書でも
古典が学べます！

大判の紙面で図版資料を豊富
に掲載。
楽しみながら「言語文化」の
つながりや広がりを実感でき
ます。



[言文 706]
B5判・312ページ



定番教材のほか、日本の漢
詩も掲載しています。



生徒の興味を引き出すため
の「ブックガイド」が充実
しています。

小説や随想、評論だけでなく、
古典の名作をコンパクトに味
わえる「古典の世界」を設け、古
典作品を11本収録。文学のす
べてを一冊に盛り込みました。

クエスチョン & アンサー

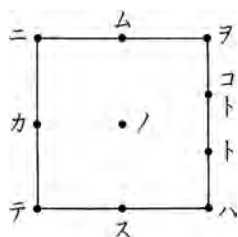
ヲコト点

Q 展覧会で漢文で書かれた古文書を見ていたら、漢字のあちこちに朱の点がついているのに気づきました。これは何ですか。

A 清水信子^{しみずのぶこ}

(公益財団法人 東洋文庫)

それらの朱点はヲコト点(乎古止点)というものです。漢文を日本語として読むため、漢字の四隅、中央、外側などに書き入れた符号で、「・」「┐」「┌」「└」「┘」などの種類があります。その種類別と書き入れられた位置の違いにより読みが変わり、図は「・」の位置に対する読みを示したものです。「ヲコト点」の名称は、右上とその下の点の意味する「を」「こ」から、



ヲコト点の一例

また助詞を示す「てにをは」は、左下、左上、右上、右下の「て」「に」「を」「は」に由来します。

その始まりは、平安時代の初期(八〇〇年頃)、奈良の学僧によって考案されたも

のとされ、当時、学僧とともに学問の主流であった博士の間にも広まりました。博士とは古代日本の官僚の養成機関、大学寮で教授した官職で、その家は博士家と呼ばれ、家ごとに専門があり、代々継承されました。

当時の学問は、漢籍(中国の古典文献)から学ぶことを基本としており、そこに書かれた漢文を日本語として読む(訓読)ために、ヲコト点などの訓点が必要でした。その訓点を付すためにはまず文章の意味をとらえなければならず、その解釈は各家により異なり、秘伝とされました。解釈により訓点にも違いが生じるため、当初、訓読を簡便に書き入れるための実用的なものだったヲコト点は、中世に入ると自家の解釈を他に知られぬための秘密の符号という面もあり、学僧の宗派、各博士家により複数のヲコト点の方式が生まれました。その後、ヲコト点は鎌倉時代に入るとしだいに衰え、江戸時代には一部を除いてほとんど用いられなくなりました。

東洋文庫にも国宝『史記』をはじめとしてヲコト点を書き入れられた資料があり、ミュージアムでは、実際にそれらを目にするができます(展示は時期によって変わります)。

web 連動—漢字文化資料館

日本画家、安田靉彦の描く『鴻門会』

鶴見^{つるみ} 香織^{かおり}

教科書に選ばれる靉彦作品

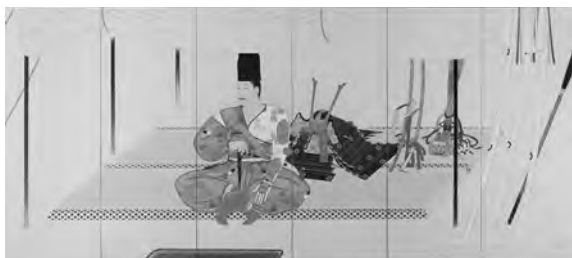
絵画作品のなかには、美術ではない他の教科の教科書にひっぱりだこの作品がある。例えば国宝の《絹本着色伝源頼朝像》（神護寺蔵）は、ひと昔前には必ずと言ってよいほど日本史の教科書に掲載されていた。しかし、一九九〇年代にこの絵の像主が実は頼朝ではなく、足利尊氏の弟、直義だとする研究が発表され（米倉迪夫『絵は語る4 源頼朝像 沈黙の肖像画』平凡社、一九九五年）、その信憑性が確実視されるようになると、教科書の編集部は困ったらしい。代わりに掲載すべき「頼朝像」として急浮上したのが、安田靉彦（二八八四—一九七八）が描いた《黄瀬川陣》（左隻は一九四〇年、右隻は一九四一年、東京国立近代美術館蔵、重要文化財）だった。

《黄瀬川陣》は六面が折り畳まれる六曲屏風二つからなる作品（この形体を六曲一双屏風という）で、平たくのぼすと

東京国立近代美術館主任研究員。専門は日本近代美術史。著書に『鐫木清方 美人画集成』（共著 小学館、二〇二二）ほか。担当展覧会に『菱田春草展』（二〇一四）、『安田靉彦展』（二〇一六）、『没後五〇年 鐫木清方展』（二〇二二）など。

縦一六六・八センチメートル、横幅は二つ合わせて七四一・六センチメートルもある。右隻には黄瀬川に陣を張った源頼朝が座し、左隻は源義経が今まさに参着したところ。二人の出会いの場面である。そしてここが大事なのだが、作者の靉彦は、頼朝の顔をかの《絹本着色伝源頼朝像》を下敷きにそっくりに描いている。誰もが慣れた頼朝の顔。たとえばそれが本当は頼朝の顔ではなかったとしても、《黄瀬川陣》の頼朝は頼朝として描かれているから、「頼朝像」として問題ないというわけだ。

そして教科書編集部は悩む。欲しいのは頼朝の顔だけなのに絵は大きすぎる、と。そこで顔の部分だけをトリミングして掲載するという乱暴な教科書も現れたが、画家と美術作品へ敬意を払うためにも、ここはぜひ全図を掲載していただきたいものだ。なぜなら、靉彦は作品全体の構図を吟味し、人物の周囲に描き込んだ甲冑、太刀、その他の道具すべてにおいて考証を凝らし、絵に含蓄を込めているからだ（このこと



安田靉彦《黄瀬川陣》 1940/1941 年 紙本彩色・六曲一双屏風
東京国立近代美術館蔵 重要文化財 Photo: MOMAT/DNPartcom

は次の論文に詳しい。増記隆介「安田靉彦『黄瀬川陣』における古典学習」、『美術史歴参——百橋明穂先生退職記念献呈論文集』中央公論美術出版、二〇一三年）。

優れた技術に支えられ作品自体がきわめて美しい。加えて、考証が確かで含蓄がある。それが靉彦作品の妙味であり、教科書にたびたび掲載される信頼度の高さに結びついている。

もうひとつ、お呼びのかかる理由を挙げるとすれば、歴史や故事に関する靉彦の教養の豊かさだろう。彼の作品には、他の誰も絵にしなかった歴史の名場面を、ありありと描いたものがたくさんある。そのなかの一点が、『鴻門会』（一九五五年、東京国立近代美術館蔵）だ。

《鴻門会》に描かれたもの

《鴻門会》は漢文の教科書への掲載依頼が多い。司馬遷による『史記』中の一話に取材した本作は、当の文章とともに掲載され、場面をイメージするのに役立っているらしい。

時は『キングダム』と『三国志』の間の紀元前二〇六年。秦の都、咸陽を先に落として函谷関を封鎖した劉邦に、別ルートから攻め入った項羽は激怒する。それを察知した劉邦は、弁明のため項羽の陣にのりこんだ。劉邦の言い訳を聞き入れた項羽は宴を催すが、項羽の軍師である范増はこの際にライバルの劉邦を討つてしまおうと、部下に剣舞を披露させ劉邦の命を狙う。

「項王・項伯東嚮坐、亜父南嚮坐。亜父者、范増也。沛公北嚮坐、張良西嚮侍。」（史記・項羽本紀）

項王こと項羽と、項羽の叔父である項伯は東を向き、亜父こと范増は南を向き、沛公こと劉邦は北を向き、劉邦の軍師・張良は西を向いて宴の席につく。この絵では画面手前が北方であり、向かって右に座る人物が項羽、奥に座して顔



安田靉彦《鴻門会》 1955 年 紙本彩色・額 東京国立近代美術館蔵

Photo: MOMAT/DNPartcom

の隠れた人物が劉邦、そして左で背中を向けた人物が張良ということになる。『史記』はこう続ける。(一) 范増が腰に佩した玉玦^{ぎよく}を挙げて合図するも項羽は動かず、ゆえに部下項莊に劍舞を命じる。(二) 劉邦を討たせまいと項伯が劍舞に加わって妨害する。(三) 張良が部下の樊噲^{はんかい}に急を告げに出る。(四) 樊噲が盾をふりかざして乱入する。

絵を見ると、ここには(一)から(四)までひとつの画面にすべておさまっていることが了解される。すなわち、右から二番目が范増であり、席を立てて右端の項羽の顔を見ながら飾りのついた玉玦を右手でふりまわしている。右から三番目と四番目、長劍をふりかざして劍舞を舞う二人が項莊と項伯。劉邦の前に立ちほだかる方が項伯であろう。樊噲は東側の入り口から目をむいて駆け込んでくる。

『史記』の述べる時系列が画面のなかでかように圧縮されているのは、息詰まる緊迫の場面を演出するためと理解できる。時系列ばかりではない。空間も劍舞を舞うにはあまりに狭い。それが上部に張り巡らせた幕によってさらに狭められている。視点を人の眼の高さに定め、折り重なるように人物を配置したことも、切迫した事態を表すのに効果的だ。

そももうひとつ、この作品の見どころとなるのが、劉邦たちの秦漢時代という舞台を、作者である靉彦がいかにしてそれらしく描いたか、である。

項伯、項莊、范増の冠

軋彦は有職故実や服制に知悉するばかりでなく考古学の新しい情報にも常に関心を注ぎ、それらを歴史画の制作に活かした。ならば《鴻門会》もそうして描いたと仮定しよう。それなりに発掘品がある帶鉤（いわゆる帶留め）や玉珎、長剣などはよいとして、冠はどうだろうか。この作品で圧倒的に物珍しく感じられる、項伯、項莊、范増の三人が頭につけている被り物には、どんな典拠があったのだろうか。

彼らの被り物は、赤や青のバンドがついた平たいキャップに、なにやらネット状のたてがみ、あるいはお面のような細工が留めてあるように見える。同じ時代の日本の画家が描いた作品で、似たような被り物が描かれた例は寡聞にして知らない。



それが今なら、こんな被り物があつたらしいことは幸いにして調べがつく。山東省の沂南^{きなん}画像石の壁にこれとよく似た冠をつけた人物像があるからだ。これは武冠（武弁大冠）であり、この形は漢時代のものらしい。キャップは平巾幘（あるいは平上幘）といい、ネット状の部分は透かし織りの布を黒漆で固めたもので籠冠^{かごかん}という。それを顎下で紐を結んで

固定する。沂南画像石墓の発掘が始まったのは一九五四年だから、軋彦が《鴻門会》を構想するのに刺激を与えた可能性はある。だが問題はそんなに簡単ではない。というのも、軋彦はこの作品の十七年前に《孫子勦姫兵》（一九三八年、靈友会妙一コレクション蔵）を描いていて、孫子の訓練を真面目に受けようとしぬ姫兵たちに同じ冠をつけさせているからだ。

軋彦の言葉を聞こう。彼が中国古代を絵にするために参照したのは武氏祠画像石などの拓本と発掘品、東晋の伝顧愷之^{こがいし}《女史箴図卷》（ボストン美術館蔵）等だったと本人が語っている（『安田軋彦画集』中央公論美術出版社、一九六五年。作品解説とあとがきを参照のこと）。また、『後漢書輿服志』、画像石、漢俑、朝鮮楽浪の彩窰塚、王盱墓^{おうかん}の出土品も参照したという（菅沼貞三「王昭君図」解説、『大和文華』三八号、一九六二年十月）。この冠の出どころについては語っていないが、どうやら軋彦は何かの確な資料を探り当て、今の時代でもほぼ正解と言える形にたどりついたということらしい。その出どころを探るには、もっと広くもっと深く、史料の山に潜らなくてはならないようだ。

二〇三三年度大学入学共通テスト

「国語」 漢文の分析と指導

概要と本文の要旨

二〇三三年度大学入学共通テスト「国語」漢文は、唐の白居易が官吏登用試験に備えて自作した【予想問題】とその【模擬答案】（『白氏文集』所収）からの出題である。白居易（七七二～八四六）は、字は樂天、号は香山居士等。『白氏文集』は白居易の詩文集、初め親友の元稹（げん）が『白氏長慶集』五十巻として編集し、白居易自身が新作を追加して、最終的に全七十五巻として完成させた。現在では七十一巻本が通行している。平安時代、白居易存命中に早くもわが国に伝来し、わが国の文学に多大な影響を与えたことは、よく知られている。白居易は、詩人・文人として高名だけでなく、官僚としても優秀であり、『文集』には詩のほか、策林（政治問題の議論）・百道判（官僚の模範裁決集）等も多く収められている。今回出典となった「請以族類求賢」（族類を以て賢を求むるを請ふ）は策林の一つである。原文からは、【模擬答案】問題文の途中と、問題文に続く部分が省略されている。

北澤 紘 一
（代々木ゼミナール）

二〇年度センター試験、二一・二二年度共通テストと三年続いた漢詩は出題されず、二文とも散文であった。ただし、四字句・六字句が多く、対句を多用した技巧的な文章である。複数問題文は、試行調査、二一・二二年度から引き継がれており、現時点で大学入学共通テストの特徴となっている。本文の字数は【予想問題】が三八字、【模擬答案】が一五四字で、前年度より十三字減少した。設問数は七問、マーク数は九箇所、前年度と同じであった。

【予想問題】【模擬答案】は、もとは一続きの文章であり、問題文が複数あるからといって、特別な読み方をする必要はない。定番の漢字・語句の意味、解釈、白文の読み方、空欄補充問題のほか、問4・問6と比喩の内容理解を問う問題が二問出題された。

設問の解説

【問1】波線部ア「無^レ由」・イ「以為」・ウ「弁」の意味問題
設問文で「ここでの意味として最も適当なもの」が求めら

第4問

唐の白居易は、聖徳のたぐひ官位を以て進んで一官の榮華を求めた。その爲め、自ら不孝の罪を犯し、それに対する悔悟を文章にあらわした。次の文章は、その文章の一部である。これをよんで、後掲の問いに答へてほしい。なお、設問の解答本文を完成し、送り点、送り仮名をきいたことがある。(記号 50)

平陽府志

問自古以來君者無不_レ思_レ求_レ其_レ賢_レ賢者固_レ不_レ思_レ効_レ其_レ用_レ然_レ兩_レ不_レ相_レ遇_レ其_レ故_レ何_レ哉_レ今_レ欲_レ求_レ之_レ其_レ術_レ安_レ在_レ

朝野相綱

臣_レ聞_レ人_レ君_レ者_レ無_レ不_レ思_レ求_レ其_レ賢_レ人_レ臣_レ者_レ無_レ不_レ思_レ効_レ其_レ用_レ然_レ而_レ君_レ求_レ賢_レ而_レ不_レ得_レ臣_レ効_レ用_レ而_レ無_レ由_レ者_レ豈_レ不_レ以_レ貴_レ賤_レ相_レ懸_レ

朝野相綱 堂遠於千里 門深於九重

臣_レ以_レ爲_レ求_レ賢_レ有_レ術_レ弁_レ賢_レ有_レ方_レ術_レ者_レ各_レ審_レ其_レ族_レ類_レ使_レ之_レ推_レ薦_レ而_レ已_レ近_レ取_レ諸_レ論_レ其_レ錯_レ與_レ矢_レ也_レ雖_レ因_レ針_レ而_レ入_レ矢_レ待_レ弦_レ而_レ発_レ雖_レ有_レ縣_レ矢_レ苟_レ無_レ針_レ弦_レ求_レ自_レ致_レ焉_レ不_レ可_レ得_レ也_レ夫_レ必_レ以_レ族_レ類_レ者_レ蓋_レ賢_レ愚_レ有_レ貫_レ善_レ惡_レ有_レ倫_レ若_レ以_レ類_レ求_レ以_レ類_レ至_レ此_レ

亦猶_レ水流_レ濕_レ火就_レ燥_レ自然_レ之_レ理_レ也

(白居易の自序に引く)

(1) 臣 位に就する臣の自称

(2) 朝野 朝廷と民間

(3) 堂 一臣が居る場所

(4) 門 王族の門

れている。前年度の漢字の意味問題に続いての出題である。

(ア)「無_レ由」は、「よしなし」(術がない・方法がない)という読み・意味を持つ。①「方法がない」が正解。(イ)「以_レ爲_レ」は、「以_レA_レ爲_レB_レ」(AをBとみなす・思う)を省略して熟語化したもので、「おもへらく」(思うに)という読み・意味を持つ。①「考えるに」が正解である。(ウ)「弁」は、旧字では「辨」「辯」等がある。「辨」「辯」どちらも、「言い訳する(弁解)」「論争する(弁論)」「識別する(弁別)」等、多様な意味を持つ。波線部前後は「求_レ賢_レ有_レ術、弁_レ賢_レ有_レ方」(賢者を求めるには技術があり、賢者を弁別するには方法がある)となっており、「賢」(賢者を)という目的語から、⑤「弁別するには」が正解であると判断できる。

知識だけで正解を選べる(ア)・(イ)の正答率が高く、本文の読解を必要とする(ウ)の正答率が低かった。漢字・句形等の読み・意味の習得にとどまらず、長文を読み解く練習を支援したい。

【問2】傍線部Aの解釈問題

解釈問題は、センター試験以来ほぼ毎年出題されている。二・三年度は、傍線部の送り仮名が省略されていた(返り点は付されていた)が、今年度は、送り点・送り仮名付きである。傍線部には「無_レ不_レレ」(―しないものはない・みな―する)という二重否定が含まれているが、全選択肢においてこの部分は訳出されていない。

返り点・送り仮名に従って傍線部を直訳すると、「君主たる者は賢者を求めたいと思わないものではなく、賢者は用をなし（君主の役に立ち）たいと思わないものはない」となる。正解は③「君主は賢者を登用しようと思っており、賢者は君主の役に立ちたいと思っている」。漢文既修者の正答率は極めて高かった。自信を持って③を選べれば、本文のテーマが「君主が賢者を登用するにはどうすればよいか、賢者が君主の役に立つにはどうすればよいか」であることがつかめる。

【問3】傍線部Bの返り点と書き下し文との組合せ問題

センター試験以来の白文傍線部問題の定番形式であり、二・三年度もこの形式で読みが問われた。本問は全設問中最も正答率の低い問題である。なお、選択肢右側の返り点は、左側の書き下し文に合わせて付けられており、右側返り点と左側書き下し文とにずれがないかを確認する必要はない。「貴賤相懸」と「朝野相隔」、「堂遠於千里」と「門深於九重」が対句になっていることに注目したい。対句になっている二句は同じように読まなければならない。また、対句部分から「以」等に返って読む場合、対句全体を読んでから「以」等に返読する。①「貴賤相懸たるを以てならずして、朝野相隔たり」は、「不^テ以」を対句の前半「貴賤相懸」だけにかけて読んでるので誤り。③「堂は千里よりも遠きを以てならずして」④「堂は千里よりも遠きを以て」は、「不^テ以」

「以」を対句の前半「堂遠於千里」だけにかけて読んでるので誤りである。②「貴賤相懸たり、朝野相隔たるを以てならずして」は、「不^テ以」を「貴賤相懸、朝野相隔」だけにかけて読んでいるが、「貴賤相懸、朝野相隔」（自分の高い者と低い者、朝廷と民間とが隔たっている）と「堂遠於千里、門深於九重」（君主の居る場所が千里よりも遠く、九重よりも深く離れている）とは、ほぼ同義である（皇帝と臣下・民間とが隔絶していることを表す）ので、誤り。

「不^テ以」を全体にかけて読んでいる⑤「豈に貴賤相懸たり、朝野相隔たり、堂は千里よりも遠く、門は九重よりも深きを以てならずや」（貴賤・朝野が隔たっており、君主が遠く深く離れているからではないか）が正解。

「一を以てなり」（一からである）に違和感を覚え、④を選んだ受験生が多い。なお、文末を「ずや」と結んでいるが、ここは一般的な反語の文末「ざらんや」と読んでもよい。

【問4】傍線部Cの比喩の内容理解を問う問題

「傍線部の比喩は、『線』・『矢』のどのような点に着目して用いられているのか」を求める問題である。比喩の内容理解を問う問題は、共通テストになってから初の出題である。

本文では傍線部の後に、「線^{リット}因^{ハリテ}針^ニ而入^ス、矢^ハ待^チ弦^ヲ而^ス發^ス。雖^モ有^リ線^ノ矢[、]苟^{クモ}無^ク針[、]弦[、]求^{ムル}自^モ致^ス焉[、]不^レ可^{カラ}得^ス也」
（糸は針によって布に入り、矢は弦によって発射される。糸矢が

あっても、針弦が無ければ、それだけで用をなさそうとしても、できないのである」とある。「線」には「針」が、「矢」には「弦」が必要なのである。正解は①「『線』や『矢』は、単独では力を發揮しようとしても發揮できないという点」。形式は見慣れないものであったが、正答率は高かった。

【問5】傍線部Dの空欄X補充と書き下し文との組合せ問題

傍線部中の空欄補充と傍線部全体の書き下し文との組合せ問題は、二二年度の追試験で出題されている。

傍線部とその直前は、「若^シ以^テ類^ヲ求^ム、以^テ類^ヲ至^ス」となっており、「もし同類によつて人材を求めれば、同類によつて人材がやつてくる」という意味になるはずである。③「必ず類を以て至ればなり」が正解。誤答②「何ぞ類を以て至らんや」が多かった。「何ぞ類を以て至らざらんや」と勘違いをした受験生が一定数いたものと思われる。

【問6】傍線部Eの内容説明問題

設問文で「傍線部はどういう意味を表しているのか」が求められている。傍線部の内容説明問題は、共通テストにおいては二一年度追試験以来の出題である。内容説明問題は、傍線部そのものの理解を問うもの、本文全体の理解を問うもの等、様々なパターンがある。傍線部直前に「此^レ亦^モ猶^ホ水^ノ流^レ湿^シ、火^ノ就^テ燥^ニ」（これは水が湿った方に流れ、火が乾燥した方向に流かうようなもので）とあり、選択肢冒頭がこと対応してい

るので、本問は問4と同じく、比喩の内容理解を問う問題になっている。「水は湿ったところに流れ、火は乾燥したところへ広がるように」とある④が正解である。正答率は高かった。

【問7】全体の内容理解を問う問題

「予想問題」に対して、作者が【模擬答案】で述べた答えはどのような内容であったのか」を求める問題である。

【模擬答案】第二段落に、「方術者、各審^ラ其^ノ族^ノ類^ヲ、使^{ムル}之^ヲ推^{シテ}薦^セ而已」（賢者を求め弁別する方術は、それぞれ同族同類を明らかにし、同族同類に人材を推薦させることに尽きる）と明言されている。④「賢者のグループを見極めたうえで、その中から人材を推薦してもらう」が正解。

予想と対策

今後も複数の問題文が提示されるものと予想される。ただし、形式・内容・難易度にわたり特別な読み方・解き方を必要とするものではない。知識で即答できる問題・文脈理解を必要とする問題がバランスよく出題される。漢文に由来し、わが国の言語文化を形成する漢字・語句・定型表現（句形）・漢詩・故事成語等の正確な知識の習得、漢字の読み・意味にとどまらない用法にまで踏み込んだ正しい理解、（選択肢を使つて解答するテクニクではなく）自力で本文を読解する力が重要である。

西嶋佑太郎 著

〈あじあブックス〉

『医学をめぐる漢字の不思議』

四六判・並製・二二二頁・
定価 二四二〇円（税込） 大修館書店

もし医者から「あなたの病名はこれです
ね」と言われて「胃酸嘈囉」と記したメモ
を見せられたら、どう思うだろうか。おど
ろおどろしい字面に不安がつのり、何か重
篤な病気に違いないと慌てるのではないか
しかし、心配は無用、この四字は今に謂う
「胸焼け」の古名である。しかも、古名と
はいえ、昭和初期まで使われていたとい
うのだから驚きだ。

こうした医学用語と漢字の問題に関する
興味津々の話題を数多く取り上げ、その故
事来歴を手堅い文献学的手法を以て説くのが
本書である。全体が三章から成り、第一章
「漢字をつかった医学用語の略史」の内容
を念頭に置いて、第二章「先人たちの試
行錯誤」と第三章「現代医学用語の生い立
ち」を読めば、漢字で記された医学用語そ
れぞれの持つ「不思議」が時間軸上に落ち
着きどこをの得るとの仕掛けだ。

第一章「漢字をつかった医学用語の略
史」は、漢字で表記される医学用語がどの
ような史的变化をたどってきたのかを略述
する。上に挙げた「胃酸嘈囉」も本章の一
節（三八頁）に見える。とりわけ章末のま
とめが見事で、現代の医学用語には各時代
の用語・文字・表記などが重層的に流れ込
んでいるという（四七頁）。旧来の漢方用
語はもちろん、江戸は蘭学期に生まれた用
語や文字に加え、近代中国から輸入した用
語や、さらに戦時中に表記が簡略化された
用語まで混じっており、しかも「医学用語
は現在も少しづつ変わり続けている」（
一六六頁）というのだから、本書のよう
な手引書微（な）げれば、とても門外漢の手に負
えるものではない。

第二章「先人たちの試行錯誤」では、室
町・江戸時代から明治・大正を経て昭和の
戦後に至るまで計十四種の話題を取り上げ、

先人たちが情熱を以て医学用語に創意工夫
を加えていたありさまを記している。なか
には、情熱というよりも執念、それも奇矯
な執念としか思えない独創性を発揮した先
人もおり、今日とかく好まれる「個性」の
語が色あせて見えるほどだ。章末の十二
〈近視と漢字の簡略化〉、十四〈石原忍と
新国字〉は、国語国字問題の側面に新た
な光を当てた点でも大きな意義を持つた
ろう。

第三章「現代医学用語の生い立ち」は、
現代の医学用語に見られる漢字の字体や字
音について計十三種の話題を論じる。なか
んぞく六〈癌〉と「がん」は違う？〉は
素人には衝撃的な内容で、漢字表記「癌」
と平仮名表記「がん」とを異なる意味合い
に用いる流儀があるとは夢にも想わなかつ
た。

世の漢字好きに、本書が記す類の漢字論
議を嫌う向きはないだろう。未解決の問題
は率直に未解決だと認める姿勢が好ましく、
人名・書名・事項を統合した索引も使いや
すい。さっと一読するだけでも、何やら賢
くなったような気になる好著である。

（古田島洋介・明星大学教授）

小曽戸洋著

『中国伝統医学 名医・名著小百科』

四六判・並製・二八八頁・
定価二、六四〇円（税込） 大修館書店



中国歴史上の名医と言えば、一般には麻酔薬の麻沸散で外科的な手術を行った後漢末の華佗がまず思い浮かぶのではないだろうか。「三国志」の世界で馴染みがあることや、全身麻酔手術を成功させた江戸期の医師華岡青洲から思い至ることもあろう。また医学書の類もかろうじて『傷寒論』の名前を目にすることがあっても、作者の名前を挙げられる人は少ないであろう。

評者のような東洋医学に興味を抱く初心者にとって、いわゆる工具書は言うに及ばず、思想や文学の方面とは段違いに入門手引書の類が少なく、内容のうすさはもとより、その内容が信頼に値するものかどうかが、ずっと悩みの種だった。

かつて『列女伝』の「斉太倉女」を調べていた折、『史記』の列伝によって父親が前漢のいわば食糧庁の長官で名医でもあったことまでは容易に知り得たのだが、父の

倉公に医学を伝授した陽慶なる人物については手がかりを得られないままであった。

その後、陽慶を主人公とする小説の存在を知り、『史記』『扁鵲倉公列伝』に倉公と併載される扁鵲が最古の名医であることも知るわけだが、いま小曽戸洋先生の新刊書『中国伝統医学 名医・名著小百科』を手にし、嘆息するのみである。全て出ている、もっと早くにあつたらなあ、などと。

著者の小曽戸洋先生は、既に大修館からは同じ「あじあブックス」のシリーズで『新版 漢方の歴史』『針灸の歴史』という入門者にも専門家にとっても必須の書を上梓され、『日本漢方典籍辞典』という大著もまとめられている東洋医学研究の第一人者である。

名医・名著の（小）百科とあるが、例えば『黄帝内経』に登場する名医が連続して掲げられ、医学を形成した岐伯、編述に

与った伯高、薬物の調整法に通じた雷公、重要だった馬医の馬師皇、外科手術に長けた俞拊、と役割分担があつたことを新たに知ることができた。また全てに初出の資料だけではなく人名・書名が登場する後の時代の資料まで恐らくはほぼ漏れなく掲げられていて、その人物・書物の歴史的な評価を知ることもできる。

名医については近現代に至るまで多くが掲げられ、頭の整理がしにくい金・元代の学派の流れなども把握しやすい。名著では例えば『黄帝内経太素』の解説には納得させられるし、日本にもたらされて以来の書誌学的な解説は、日本の医学史を知る上で貴重な内容であろうと思う。

ちなみに扁鵲だが、漢字の伝説的な考案者の倉頡がその名前に「創（きず）契（ちぎり）」の意味が込められ甲骨と金文を象徴しているように、針と関わり深い「砭（いしはり）」と「寫（かささぎ）」↓瀉（補瀉）を想起させるし、本名の「秦越人」も意味有りげである。などという与太話とは違い、本書には興味深いコラムが四話載っており、これも是非一読をお勧めしたい。（末岡実・フェリス学院大学名誉教授）

笹原宏之 編著

『なぞり書きで脳を活性化
画数が夥しい漢字121』B5判変型・並製・二八頁・
定価、九八〇円（税込） 大修館書店

画数が多い漢字に対して、「難しそう」というイメージを持っている方もいらっしゃるかもしれない。しかし、画数が多い漢字の大部分は、見たことのある漢字を複数組み合わせたものである。例えば、常用漢字で二番目に画数が多い漢字は「鑑」（23画）であるが、これは金偏と「監」を組み合わせたものである。また、常用漢字で次に画数が多い漢字は「驚」「襲」「籠」（22画）だが、これらも「驚」「襲」「敬」と「馬」「襲」は「籠」と「衣」「籠」は竹冠と「籠」を組み合わせたものである。

本書は、『大漢和辞典』掲載の漢字のうち、最大画数64画から32画の121字を抜粋したものである。常用漢字で最も画数が多い漢字は「鬱」であるが、これであっても29画であり、さらに画数の多い漢字が集められているのである。しかし、

先ほど述べたように、その多くは見たことのある漢字を複数組み合わせたものである。非常に複雑で珍しい形であるため、見ているだけでは漢字の組み合わせを見逃してしまいそうになるが、本書にはなぞり書き用のマスが用意されているので、漢字を書く中で、複雑な漢字の中に潜む見覚えのある漢字を発見することができる。

また、なぞり書きをする中で漢字の広がりを感じすることもできる。本書の中には「鬱」に部首を組み合わせた「鬱」「鬱」「鬱」などの漢字が複数ある。「鬱」という共通の漢字を構成要素として持ちながら、それらの漢字が表す意味は異なっていて、漢字の組み合わせによる意味の広がりを感じることができる。

複雑な形の漢字を見ると、このような複雑な漢字はどのようにして生まれ、どこで使用されているのかという疑問が生じてく

るが、この疑問に答えてくれるのが「ささひろ・ポイント」で、これも本書の大きな魅力である。これは、編著者である笹原宏之先生のこれまでの研究成果や最新の調査結果などがまとめられたコラムで、字源や出典、使用例などが学問的事実をもとにして、わかりやすく解説されている。元代の詩に見られる「鱸」という漢字のものと意味は、鮮魚の臭いだと考えられていること、現代日本でも魚料理の飲食店名に用いられることなど、解説を読むことで、漢字の昔と今を知ることができる。

また、本書では中国や日本の漢字だけでなく、香港や台湾、広西の少数民族の方言字なども紹介されている。そのことについても解説がされているので、「ささひろ・ポイント」によって古今東西の漢字の世界に触れることができるようになっていく。

本書は、日常生活ではなかなかお目にかかれない複雑な漢字に出会い、なぞり書きすることを通してその構成要素を考え、コラムによって字源、使用例を知る機会を与えてくれる。ぜひ手にとって、奥深い漢字の世界を体感してほしい。

(山下真里・熊本大学)